

惜陰齋錄

昭和八年一月上浣起筆

特別
イ4
1919
449



176714



朝の海

借陰老也江

昭和八年一月以降

新年各方面より利未の賀意
の内特に出巻七冠の賀意
大丸主人下村正太郎の御魁を
寄る。下打の寄る賀意は
毎年の賀意の賀意
工風があるものも感心する
河の字をいふらしくもなるが
見物とすべし。



水形鶏

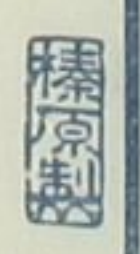
注水形鶏茶一朱

京都府京都市中京区

て一生を送つた。大正の廣尾より十中八九、寫于斐梅軒中」といふ返題があるところ。

○坪内逍遙を従ふその物余所口園をこく、園内ありて新くしを碑しを免る。福之湯の額字の下長文を刻す、(逍遙)園主の爲め、湯文を銘したる也。熱海は(逍遙)自方の碑、いこんと他に村内の会日湯の碑ありあり。

○新子の熱海御嶽に依る旅遊施会の手り代するもの回遊堂は、のふふと、徒を容るるのみ、窮を乞ひ、地万酒を呼ひ一瓶のこいん、女リつきたるも下拍、容易み出ず、伴ひたる女也。七かか、自ら町に出る、塩辛と鹽み糰と



焼ひ物づく、あちし塩辛を扱ふ若うし、べルを心うしと女中を呼ぶが、西側と火若うて喰ひ女、火突つと云く火箸あるを消毒のとき、きたることありし、予の若生時代より、幼ることありし、旅会の混雑を、あへし。

○内海と文の別在と、此の主人余に示す、山井藤陽の梅所の幅を、示す、いん余が、舊花物也、匣面に、是も、亦、乃、余、公、書、也、藤陽の勤王家を、叙、任、う、御、沙、汰、を、始、たる、もの、予、の、心、花、の、友、人、の、手、り、み、か、る、い、昔、縁、と、す、由、梅、の、楕、上、に、入、江、為、守、の、和、歌、の、變、物、を、か、く

梅の花心より、かゝる、梅も、あ、い、い

見てさのりるきかたや手折らむ
不折丸のくぬ木うこゆる元松

常盤の道七いや、かまうして

予此の油を煮ます、

内ふらふも海行雄の此記よひなる夢のうらを語り
まんか金海三平か洋英十才英正婦人のうらまへん
かまうそ、まの**■**英國のたご定母とて定をせり
書簡が口姓びある行雄の手入身誤り後
なる縁因が終に法塔の端とるうなる也と
のほゆもささの影の心なま
—かすのれおけかせて又年入しん
試業をいぬきけいせぬ歎を試する



斐南の年端の白の云々

早知杖減ちよの勢　ろろろろ

古知やへる更り一向をあらけり

かきそののりかえりぬ際をまらう白

みづのせの面の年うえしあんの和記に

起極つるふ若みの音伐き、ろろろろ

又と一丸とらう面の初朝

まふき、まらふやとむかちあまうあうと

逆あふ年を祝かさ屋のや

ち道の抱負えん

○木の葉、自動車を池や新奴の天井、予の押
毫の、川氣蒼古の板を装、予を一説す、徳也

百六枚の内成るの僅に十枚をとり、全部押書をした
すゝゝの心く一年を要すへき歎、例の樟の大樹を
又この年未の暴風四五の枝折れを溪谷を歴
しつゝのあり、中天に引こけて降下せざるもあつ、あ
らう老樹を傷ふことの無残さ一人として懐徳の情
を話してさしあ、既多多くの日子を経るゝ何故
狼藉の跡を理めざるや

○今次の熱海行兎のりんと稀音家六のりす
去任小三郎を法あり、あ人れ、此に別荘をこきみ
今いあ人れ在り、杉本(稀音家)の別荘いと二年
先因今の日本旅館の附に在り、文化的挿話を交
へる任是也、去任のいぬ道好形地の地を更敷



下上りなる書き本あり、純白を風うと氣の利いれこ
挿話を京都の大工の普請ううと、ああぬい
之派まゝ也、余時、杉本の合する城合あるを
去任より往年池田龍一の席を令して以来初の
てして、彼ゆて可る志あり、酒酌しておちりい
男まゝしが今い禁酒して杯を挙げずとさふ、哉
然らまんか柱と階の重畳一杯を飲けんとの
を禁酒とさへていさふも成り子息、吾れのみ女史
と傳ふと重畳入り紙目且つ合ふ、東海に在つて
此家の割草の口をさふとさふ
○政述のあ年難く因念由三らの進徳法が載つて
おつりをえつと左のれき記つてあり

明治十四年の三月、上野の公園に二回内閣勅書
展覧会が開かれ、その絵画の部も出る。狩野
芳山、横尾雅邦との画がフエ子ロサ氏や次
兄(寛三)の眼を惹いた結果、遂に市時米四
の高家の若紳士として、フエ子ロサ氏の許にたつ
たのである。ドクトル、ビゲロー氏が、その画伯のハ
ロンと云うるものから、毎月、金二十金づつを、画
伯に提供し、気が向いたら筆をえつて下さい
と自由の心もちて、画の道に精進をこころせられた。是
れ、甚しい賞賜の生活にさいるものと、東洋の畫
伯といふ、いふまゝの嬉しむものたる。市時の二十金
はい、これ金持ちであるのだ。



自分といふと、漢人が現存するもの、若くは雅邦の畫が
外人に認められ、外人の作畫家となすことを思ふと共に、
邦人の認識不足も、想はれたいを得る。亦、ビゲロー
が米國の著名畫家であること、フエ子ロサの家と同様
に、これも初めを知つた。フエ子ロサの畫が、ビゲローと、
畫つて、筆を出させ、この前巻に、録したか、同様した、
係から、一ひ、不負、市時、記つた、ある。フエ子ロサ氏が
書畫を、好む、その、窮して、金を、餌として、ビゲローから、金を
えつた、こと、ふ、こと、も、ビゲローが、富人、の、おれ、から、あつた、
ことが、初め、の、理解、である。

因に、市時、を、見、て、市時、の、身、由、三、部、の、横、濱、の、本、町、の、一
時、成、人、で、あつた、石、川、屋、と、云、ふ、生、徒、高、の、子、で、此、の、生

糸高の柳前の蒲命が言人かよんといふの、後、生歌して江
戸へ移り、四條宮の下尾のあたりに日本橋橋を町に城
前尾と云ふ所、人宿を開いたこともあつたといふ、元三
川と角花と云ふたうを政のたうと云ふて

○竹橋井上潤めと共に道名おの宅に招へん酒合の
御書と云ふ、市上潤め、あま山子の句をもとも潤め
予のあまも紙短冊に押書

麦折りもうしてあま山子の句をまじく
のは、人と人をかへつたあま山子、うま
潤め又、一茶のあま山子の句を示す云々

妹捨はあま山子とあま山子丸
予一茶のあま山子の句を抄録、らんごも末に此句を



知れぬ流石に一茶の句の味あへし

道達の出歌は前、保一江の推敲を往々をも更々考
いて云々、乃ち左に収む、道達亦二三紙揮毫、予の
あまも酒合を録して云々、醉裏得真如、と今心の
禱也、酒次生田七郎、潤西友人の花幅うるとも良寛
の心切の幅を示し、真廣の幅をもとて、長崎のま
ては毛紙の入流り状、茶を詠し、詩を極めて難能
讀のよ、田七郎、たうりし、次行脚、を去、味、あ
し、ことあるか、履也、と思ひ、さう、この、良寛の、
寺時代の墨、法師、人、と、傳、さ、よ、あ、う、ん、其、時、代、の、よ
う、ん、か、あ、り、珠、う、り、

たのむ家

年をいふは

あつたは

いさか

ま初

書初

二) 粒極

は雨の初朝

みづの

の音

を

は

な

あ

な

な

な

な

な

な

な

な

な

の内に山子三箇と記する事と挿記せん

一とんぼうまつやせんあま山子一つあり
カウエロリ子の子の音る おまひ出のぬま
の七とんぼうちりぬら

他の一枚の古事記の文の意をきうてぬる、あま山子の前記蛙がまつてあつての圖は、ツエヒコも一とんぼう

山子

所謂久江屋古者、於今者山田三箇
富田屋者也、以神多是、雖不行書
知天下、其神也

左古事記、大田主神、初逢

少名毘古那神、傳下

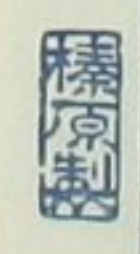
節

聖天にまつてあて何の事かともわらぬものとの説がある。
古事記の正文の右にぬれごとく、今山田の富
富騰とよみが即ち久比日比古が、今山田の富
祖であることを初めてわづらへた。此の二書、今山田の富
つて表裏せんことをわづらへた。

尚ほ序に記すべきことのある、今山田の富
佛都の左の八歌が存しあること、今山田の富
山田守の佛都の身こそ、今山田の富

山田守の佛都の身こそ、今山田の富
秋果てぬぬの訪か人とも

とある此の玄奘の植武天皇の時の高僧が、今山田の富
田圃を守つた人である。此の佛都の、今山田の富
都とよみが、今山田の富



ふらふらといふ一致する、今山田の富
から此の身よりある、今山田の富
矢法、今山田の富
ソフ、今山田の富
ある、今山田の富
ある、今山田の富

但れか、今山田の富
かほ、今山田の富
る、今山田の富
肉、今山田の富
香、今山田の富
此、今山田の富

侍氏を引いてあるのをおもしろい。

○昨夜は夢をみて枕頭の冊子を取り上げ巻を捲て二
つ折開き了る孩を取つてその手は丸粒丸粒の紀行記を
集めて見ると中にも江都の紀行を尋ねておもしろい
予の離陸時の様子を知らざりしよし也。其の紀行の目
録、御嶽山の方面云々露の露云々北玉の海云々海洋の
旅皆佳也。就中予丸丸海洋の旅は印度洋の書
たのり森を叙するの筆致をまことに

賞味也。世帯の殆んど海ゆかざる。殊に大洋の上はたゞ
晴か直る光に揺る。日か直る夜の少々の後を追
う。まゝ闇が舟の暗い。舟もまゝ籠つてあると思
ふ。何の隙もあらず。何の隙もあらず。全く不意撃



二、あまはゆくの日の一前が深い。

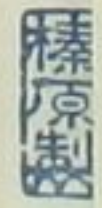
初めの光を射しきり、れが朱玉の一片がある。闇もまじり
がつかまぬ。波もまじり。闇もまじり。元々との朱玉の
抜け出ると、忽ち金光をばつと四散せしめる。才二
醒めて曉きまの波はあつた。きらつと其光波が空際
から傳播する。と、さうして八方へ散つて、五つて其の光
をまじりけしきり。闇はもうこの裏切りを逢つて、
全く力をまじりて、まじり、大きな紅の丸もまじり、今ま
じりの自分の顔も、夜の面を、まじり、日の前へ展開し
て、何やなく逃ける力もまじり、居るうちにまじり、波を
まじり、
まじり、

まじりの顔もまじり、まじり、まじり、一日の闇、まじり、大洋のまじり、我

の今得道はと寄せしむる質をいふ紙は
 錦江昔紙と名くこころを朝日雁全雁北道花朱郡
 産。錦江の溪の中へ生せる。其昔を紙面へ漉せし
 こみたるより内地の三極を配合しあり。昔織細き
 あり。そのの紙政あり。先年同一紙の大なることと
 なることあり。然るも其産地の今次今得道。紙の
 初めとあり得たり

紙の寄賣えり
 京城本町二丁目法亭南
 京城支店
 三つと

京福社
 新津 西
 教団 茶屋 385 = ち



श्री नववर्णम्

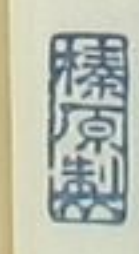
一月去

回

前口破き一が特一一枚の戦書をはり客を介する洋風の
東山子に鳥のときうなる回々沙漏の移を影と云く
法律を東山子に授けの物うとてうらうらいつまむ
おろし格指のまきで指すおくと、こらうい鳥ども
が志まひらる懐んこはからまへで、せんをささう

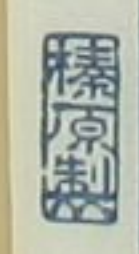
木りーして志まふ *Shak. m.F.m. A.28.1*

此書河余の如んことを好しる不し殊多戦書まむ
添くらんるいままこぶし一月廿九日熱海大平池
○自今い當るる消息往來古状揃に就て聊か考察を下
し此ことがあるが、多くの往來物を蒐めてましく検討し
て結果として唯に消息の文章を綴りしむるにせむ
又書も習字の手本とするに、斯く一巻を得るは



か二風さんて、ある時代の教育の具に供さんた。勿論消
息の体であつてもその内容の歴史を語つたの七ある文
茶あるもを教くる向に材料作らんとあるものがあるけ
七消息体であることの一貫して居り、此の消息を教く
字を習わしめたるは、史書を教くると云ふ故向ひあつ
たに相違ない。史書はあつたうらう茶儀や高きまを
を教くることこそ、番紙を思ひつきのよしの教科書の
あつたこと陳べたる過さうな。自今かこんを教る者
察をいれぬ誰んか此の消息を周到に研究する
人がさうなまぬ、世に往來のものも百七二百も寄せ
集めもある人すらある。此の研究は自知に起るべき完
れと思つた、行刊の「歴史と回文」を翻して見て初

か、斯く研究家のあることを以つた。その八木田政一と云ふ
人の古状揃の研究」と云ふ論文の本邦 日 2 枚めであ
るの事三回の大改訂進状と大改訂進状と云ふ著書と
考察を下してある。自合の全書を通讀し、そのか
ら評論を出し、来るが、此の一月箱の枚数此の全書
を元と所む格別教へること無い。此の研究家の古状
揃に就て云ふは、大衆的興味を投ずやう編纂家
としての其の内容の児童を身心の発達や教育方法に
就ての関心を以て編纂家としての多くを著述
が児童の爲めの著述にうへ、大人の教科から新出する
大人が聴いて面白く子供にうへ、又、純心な児童
を生活に觸れ、居るが、此の古状揃も



大人の興味中心に編纂せらるゝ是が著述家の教科書と
云へるとしてそのいふ感じ、自合七枚を云
ふに、内容に到底寺子屋の古状揃と云ふべきものな
い。後全の回書と云ふを入らう、いろいろ解説を加へし
て、児童の理解を助し得る態のものをいふ。此
著述家の歴史の消息性来と云ふに、既に純を欠いて
ある年代といふと、支離滅裂と云ふておろか、いふ勿論
の書で、倫次ある史料の森井編纂にあつて、考へて
見ることすら誤つて、唯此人氣のある史実と云ふ、中士
のまき持もあつた、大改訂進状も、義経も、純を欠いて
云ふ、過さるゝといふ。まよひも、實際性、後、純
文書の解、まよひ、興味もあつた、純を欠いて、擬文

をいつたかあるから 寺堂も決して正確なまへ。新古状揃と云
中々ねめれ大改状が徳川幕府の忌諱を觸れ大改の考採
西村傳兵衛が斬首の極刑に附せられたと云ふのは椿吉の
豊臣領買の大改で香頼と左社に家原をあげさせま
るゝてゐるのも無理からぬ事があるが、近状も近状の皆假託
の心があるから、家原の奸計と政敵としての極刑
の復讐を多くするも亦凡と云ふ所もまじい。まじい扱
置き多くの経来や古状類がゆゑに教育上の用を
— しかたないまが検討を要する問題だが、何人もま
まを踏みこんでゐるものがあるをどうも例をた
い。低級の高等経来の類を必要の名詞を教へるに効が
あつたかあるかが、古状揃殊々或る特殊の事を教へる内容



のふりかゝる寺子屋に採用してゐるものが多い、多くの漢
物の穿ち大人教育に資しれと云ふ方が在りあるかも知
る。

○こと— 西算の考採、板味家の程の意匠を考へし
ゐるが、餘り考採しなかつたものと思ふ。その考採の
印人版部耕石が漢印に倣つた一心に報曉炭印
とあるのが較りまゝと云つた。

北のいかに向時か、主人が元禄の由事禁をいと厳格
にせしむるに先以て眉根をひき出せ。大坂を去る
に或人の興を惹くか、知人の某茶屋に居るに
飲中八仙を擬したることあるに、吾々天心を
喜む三珠をいふ面も八仙中七あるに、よふか
から思ふと、此の身も大坂の時代にあつた。全上
の昨夜の由事禁の馬場下の別荘に招き、晩を
盡し、酒次、栗城の囀り、書冊
畫幅、後語をいふ中、日平の田舎の山本、蕨陽
の板屋の長條幅あり、我輩の左の小文をいふ
北幅、親於栗城、君熱海、別業、運面、存、拙書

書

甚予、蕪菰也、辰親如、今村人、快然、举杯

漫書時、和八年一月、中、流也

蕨陽の菰を蕪菰等と共に勤王に執事し、人として
贈位の業に浴す、此夕月、清く酒酌、時の後、も
いふ、熱海、清在、中の一快とす (一月十二日記)

石好松頼の伝介として、友人と重君に、同飲のこ、前
に録し、予、田を、松坡上村、其、古稀と、こ
く、知ん、予、の、及、心、松坡、唐津、の人、を
○天、河、洲、村、と、郷、を、因、ふ、且、つ、後、の、絶、つ、天、平、の
関係、殊、は、早、稲、田、騷、動、以、来、徳、交、の、事、も、及、ん、予、の
三、四、年、前、半、津、の、京、都、の、大、田、村、を、伴、ふ、宇、次、の
萬、葉、集、に、游、ひ、登、る、松、坡、の、清、幅、を、掲、げ、其、の、こ

く其後至今人として坐すたるもの湘南と名ふるを湘南
ハ吟聲て目負ち、席上鶴の血石歌を唱ふ、湘南亭
の爲に一詩を賦すもの約あり、予が五峯を毒以三河
名に振き其祀を爲せし日湘南天然瘧に罹り来り今
去り二三日を往て没す、花六ハ来り人をもくかこも或
許もそく回意をを致す、三河名席次、唐葉心くその
盡に題詩と缺き遂に石棟に属して七條を起せしと
湘南系六の死を悼むの神事、~~其~~言を寓して画
也、其の詩を存す石棟をくくの人才也、今思へば五峯
致し唐葉心く石棟も亦漸く恨州にたりてを得人やと
概斬、其刻ハ湘南と詩壇に主んて於て概南亭亭
の詞、肉體してある者、~~其~~註を世に傳へしことを流す、

其後より、近年高が予の想像を裏中抑り、逆籍一遍の
人、~~其~~とせしことを知し得る。餘没して七日下迄
(分取)の金錢遊ありしことを、名座の、~~其~~揮毫、~~其~~揮毫
癖のあつしことを、口々に出む時の移つと知るべし
其、~~其~~熱海つひの、~~其~~斯して、淡笑の間、~~其~~また
の玩具、~~其~~入りい、~~其~~のこのを遊、池島と云ふ、~~其~~表干
其案のこの、~~其~~遊遊、~~其~~の、~~其~~遊杯余を撰し、~~其~~聖物、~~其~~栴
園、~~其~~栴園の、~~其~~栴園、~~其~~か、~~其~~寸目、~~其~~を、~~其~~悉、~~其~~の、~~其~~遊、~~其~~遊、~~其~~の
遊杯、~~其~~余、~~其~~大、~~其~~ま、~~其~~こ、~~其~~き、~~其~~且、~~其~~つ、~~其~~價、~~其~~七、~~其~~方、~~其~~き、~~其~~る、~~其~~く、~~其~~今、~~其~~の、~~其~~一、~~其~~く
手、~~其~~輕、~~其~~く、~~其~~作、~~其~~ら、~~其~~ば、~~其~~價、~~其~~十、~~其~~廉、~~其~~と、~~其~~る、~~其~~ん、~~其~~何、~~其~~寄、~~其~~例、~~其~~の、~~其~~書、~~其~~庫、~~其~~と
撰、~~其~~せ、~~其~~せ、~~其~~る、~~其~~や、~~其~~ら、~~其~~か、~~其~~難、~~其~~し、~~其~~買、~~其~~ひ、~~其~~か、~~其~~と、~~其~~止、~~其~~む、~~其~~ら、~~其~~は、~~其~~は
か、~~其~~き、~~其~~大、~~其~~給、~~其~~馬、~~其~~式、~~其~~の、~~其~~板、~~其~~の、~~其~~撰、~~其~~海、~~其~~の、~~其~~撰、~~其~~案、~~其~~と、~~其~~一、~~其~~く

七、其の家畜、三銭の切子を
 八、其の郵便日帳元帳の
 九、其の飲食料も兼送せしむるの例と同じに、飯匙
 十、其の茶や寺家の印を押し出すを郵送せしむるの例と同じに、飯匙
 十一、其の行いんせいのが、給馬額形を此の如く
 十二、三枚指輪を東京迄郵送す、其品を印房に主
 三、其の刻字判然とせしむるも亦南時代あり、予の如く品の中
 四、其の類の印も、是と保せし玩ぶべしと云
 五、此等の品は、千うボウ、乃木中尉の隠んたる
 六、其を刺す左の切りぬき、口の中の人格を伝ふる
 七、其、不里子音の茶碗と共に愛に存すと云

藤原製

廿八年秘められた

乃木將軍の凱旋美談

記念の催しを機會に世に出た

拜謁直後・恩賜金分配



「皇師百萬征薩摩 野戰攻城宛作山 愧我何顏看交を 凱旋今日幾人還」と吟じて乃木將軍が帝都に凱旋したのは今から廿八年即ち一月十四日であつた、いま内外多事、非常時日本に生きるわれらが將軍を思慕する念いよく切なるものある折柄、来る十四日凱旋當時の將軍の聲援や戦功の深い人達が、乃木中尉で「將軍追慕の集ひ」を開く、世話役は當時副官の一人であつた、滋谷原代々木山谷二三服部真彦中尉、集まる人々は、慶應であつた河合操、大庭三郎、井上豊太郎の各大將や、親戚關係の陸軍中佐玉木正之氏、將軍兄弟の恩はか甘名に、香坂府知事ほか廿數名の崇拜者が加つて、約七十名の座定である、當日は午前十一時乃木神社谷町司が祭主となつて式典をあげ、ついで午後一時乃木邸の應接間、第二應接間、食堂において凱旋當日そのまゝの料理、勝栗、スルメ、のし昆布、鰯の子のものを食膳にのせ、酒をくみ交はして佳時を回想しつゝ、將軍の遺徳を語り合ふことになつてゐる、(カットは乃木將軍)

他の將軍達の迷惑を

心で庇ふ尊い沈黙

『私に渡したま、手を觸れず』

當時の副官 塚田老大佐談

【大阪發】乃木將軍遺骸の集ひに招かれた一人に日清戦役には乃木第一旅團副官として日露戦には乃木第三軍司令官の高級副官として戦陣に

將

軍とともに在った退後、歩兵大佐塚田清市氏(本名)がある。同氏は健康の都合で十四日に上京出來、塚田氏邸の乃木神社でさうやかな祭禮を行ふ。同氏の口によつて今まで廿八年間世にひそめられてゐた乃木將軍の凱旋佳話が語られた。塚田氏は「もう當時の各司令官達にも迷惑を及ぼさぬだらうからはじめでお話しよう」と前置して語つた。以下その話である。金圓の懸案をあげて凱旋した乃木將軍は

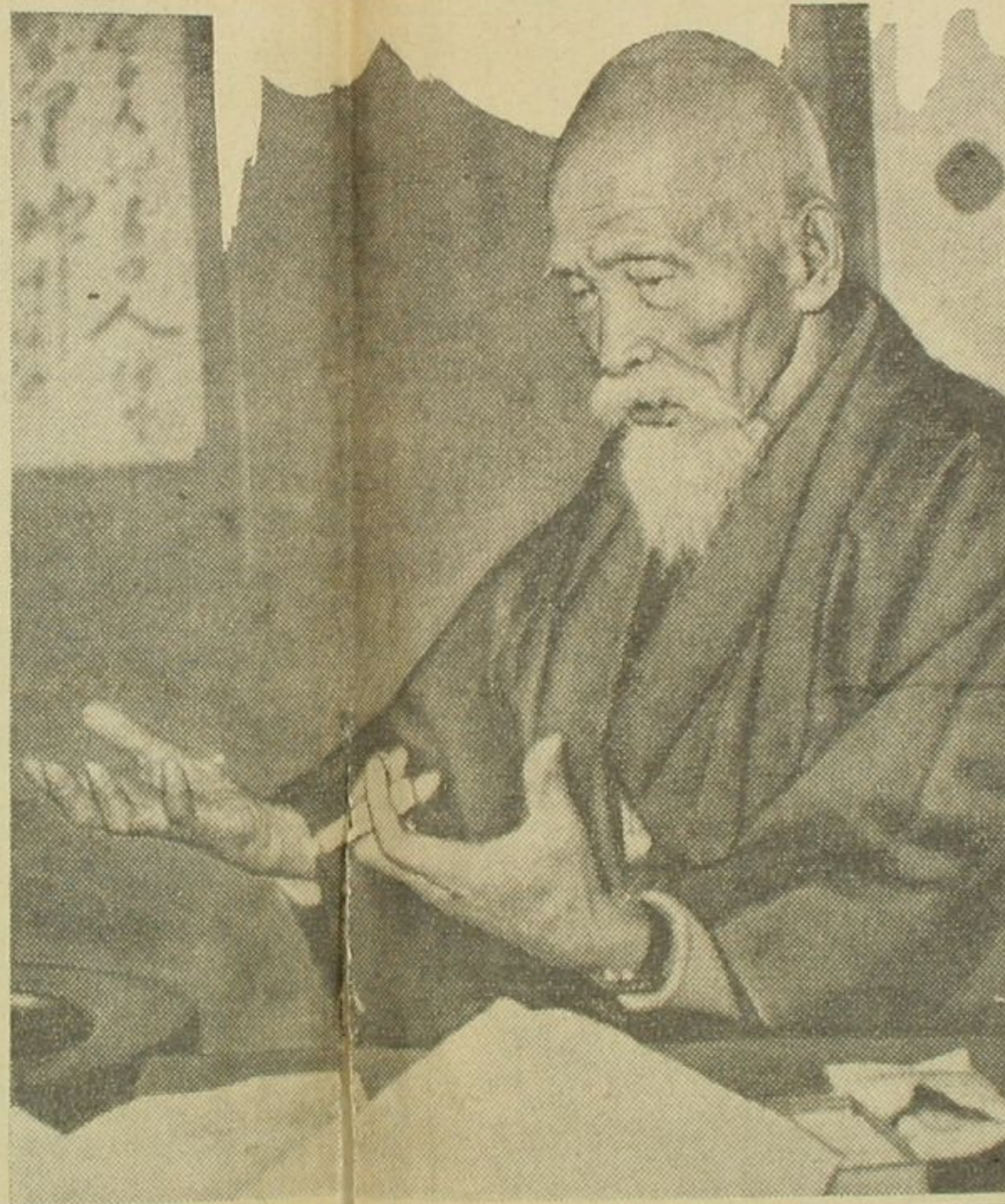
幕

旅を從へ参内、復命奏に御教書付金時計を左手に大乗書包みの御下賜品を右手に兩眼に涙を浮べたま、別室に控へてゐた塚田副官に紙包を渡した。退出後同副官が開いて見ると手の切れるような百圓札八十枚、今だ何萬圓の金額だ。副官は早速將軍に返さうとしたがどうしても受け取らず

そのまゝ銀行へ保護預けをした。その後日経つても何んの音沙汰もないので再び將軍にたづねると

大將は「外部に知れぬよう軍司令部員に預りたい」と

とて大將は金時計卅八個を求め、それに「強忍賜奉三軍」と金文字で書き



感激を語る

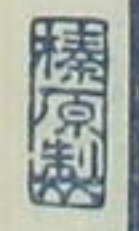
愛宕井關博士邸で故乃木將軍の思ひ出を語る塚田翁「大無量壽」

入れ箱には「皇××官、乃木希典」と自署して贈り以上の代金五千圓の深りのうち二千圓を司令部憲兵に現金で預け與へた。それでもまだ一千圓の現金があるので塚田副官は「これはどうしても閣下がお納め下さい」といつても將軍は涙として受取らず。塚田副官の愛意で戦死した二命の祭典を行つた。塚田氏は十日大阪西區靉南通三の女孀井關博士邸で

當時を回顧して曰く「今になつて考へると當時大山司令官をはじめ各司令官は皆閣下賜金を授受してゐた、その中で乃木將軍だけこれを私しなかつたことが知れると他の將軍の迷惑になるので將軍は閣下賜金の處分については一言も口外せず、天恩の優渥なることを部下と共に感謝せんとの御精魂だつたのでした」

塚田翁

○北條の寺守徒死を消え為ると行李中又無く
此二三の書籍のありしに細川亀市と云ふが著し此日
本寺領庄園経緯史一冊がある。皆寺裁後し
七六冊を讀破りて。著者より交りしに。庄園の研
究の経緯力を注いれ人と云く。其説に所はるる
七精細に涉りしをを得て居る。近年古文書を
利用しし所の研究をなすこと。か昔異人行の院
徒周里よりし方面を照すこと。さうするに實に社合
である。本書の專ら寺領庄園を説いて居るが一斑
を窺ひしもおのづから着目し得るに。庄園研究
究の缺く可からざる書と思ひぬ。庄園研究に我邦
の王朝時代から平安朝時代と涉つての大切な問題



とあり此の社会及び此の経緯を知るに是れ此利
害の實體變遷を知らねばならんが點に難題の
問題がある。その経緯を得難い。自人の特に此の
庄園に興味をもつてみるに。その概念の得
れと思つて。此書を讀み始めに理解し得ること
が少くさうない。殊に自分としての長びに多く引用さ
るる古文書中の。左も右も解し難い程の固有
名詞等の理解を得ることである。自分も此に多
少古文書と不化しとあるが。その後難い點の
點と因即して。此書を讀み始めに。聊か見
あつた。此の何處の寺に。寺の寺の
文書の内。その宗近状の。その宗近

またく擴大して全四到月系を國としてつくるべき
に到つたのである。其の不思儀な現象と云ふべきは
あるが保し寺院その他權力あるところ或る特権を興
へた結果として斯うことの生ずるの自らの勢が
ある。庄園は少くとも一獨主として朝廷の官吏
に是れを主入ることか出来ず、故に封建制度が成り、
庄園を守つる者の私兵を養ふやうな寺
又僧侶の生じれば此れがいつて微弱な政權
に對しては何百何千ともなふべき敵國が全山に散
在してゐる有様だ、亦其朝時代の紛争は抵抗庄
園に關する事であつたこと、言ふまでもない。昔ある
庄園制は、即ち封建制であること、孰したの

三三三

かくしてある。

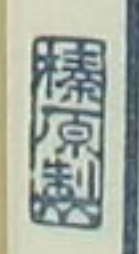
王朝時代の庄園制は、其の自體が一つの封建
制の外なきもの。身合的階級の樹立とその
封建的支配關係並に農奴制の規範
化および上下主従り臣従忠義の道德化はこ
れを以て封建制の本質の内容を成し、同時に
王朝時代の柱石、庄園の全範圍を占め、私
情と先進する者、従つて王朝時代の庄園制
は、封建制を以て自體として思ふべ
くあり、其の進歩に從ひか、見
解の古く誤謬なることを認め、封建制
度、一つの史的現象たることを、其の自體

の二史を成す、若くは愈々山に没落の過程を述
りたり、決して終合時代を成すに比ぶるは、
典型化せんが日本封建社会の全史を史的
若くは長の過程に於て区別せんが、凡そ次のこと
くさるるのがある。

成立過程 庄園制が最も支配的の形
態を採つて體制化し如くは近古時代
頃とて保元平治の内乱頃を

若くは過程 保元平治の内乱以降を鎌倉
室町時代を徳川時代の元禄享保の條ま
での期間

没落過程 元禄享保頃を幕末に至る



期間

庄園擴大の契機、國々及び三條の延久院に記録本を置きて
新立庄園の傳説を今に比ぶる、若くは實行の難し困難
にあり、比、何れも四司の庄園を許すこと、さうの
の、一方の傳説も一方の場が、朝廷若くは皇室
若くは族が、大なる庄園を擁するも、傳説を行はせ
ず、その、ある、大なる矛盾がある、こんと、以
来、或朝も傳説に有句の、致恨を病、比、さ、
有力なる、東大寺の如き、その、若くは、家分、
難い、ある、比、か、悪、保、さん、其、以、行、ん、れ、迷、信、を、利、用
して、有力なる、寺院が、朝廷、を、脅、迫、し、四司が、如、く、を、國
を、丸、占、し、比、例、力、を、か、く、し、る、

の読書趣味と旅行するがウラドム社で出版
分を催し此の年十二月
ひあう比が、自分も徳富の
等と、有り、語る、自分の漫
淡い左に収めておく、

庄司 市島先生に一つ……

市島 何が動機で書物好になつたかと云ふやうなことは、自分で會つて考へて見たことはありません。今お問があるので初めて考へる位だが、幼少の頃のことなどは、今考へても何が何んだか分りませんが、或はこんなことが、知らず／＼自分を書物好きにしたのでもあらうかと思ふことは、私の家の隠宅に曾祖母がゐまして、そこには名所圖會がいろ／＼ありました。曾祖母はかつて江戸見物に出て、東海道木曾などを旅をし

たこともありましたので、名所圖會を披てはいろ／＼説明をして呉れました。その説明はウハの空に聞いたのですが、江戸名所圖會の日本橋の雑踏の處や京都名所圖會の祇園祭の賑ひの處などがおもしろくつて、毎日々々隠宅へ出かけて、いろ／＼の名所圖會をヒツクリ返して玩んだものです。今でも名所圖會は好きですが、或はこんなことが私に書物の趣味を教へたのであるかも知れません。尙私の幼少の時分に家の近くに漢學の塾がありました。私も其處の一番幼少の塾生でありましたが、是は明治初年のことであります。其の時分の先生は星野恒と云ふ人で後の文學博士で、帝國大學の教授をやつた人であります。越後の人で鹽谷宕蔭先生の塾頭であつたのが、歸つて來て教へたのであります。家には藏書も相當ありましたが、塾の開けました時が丁度御維新になつたばかりと云ふやうな時でありましたから、家にある書物などは無用の長物のやうに考へて塾へ寄附をしました。其のうち二、三點ど



うも是は惜しいものだと思ふものがありました。それは平凡なものであります。一は左傳、もう一つは八大家文でした。平凡の書物ではありましたが奉書摺如何にも上製のものであります。献上本とも云ふものでありましたらうか、其後あんな立派な本を見たことはありません。それを見まして惜しいことをしたと考へましたのは、私の幼少の心に萌した書物慾の動いた初めであるのです。

徳富 それは幾つ位の時ですか。

市島 十二、三です。それから遊學時代には書物が好きで時々それが爲に借金するやうな事がありました。先刻から段々お話もあるやうな譯で、實は書物屋から大分薰陶を受けた譯なのです。此の頃一寸何處かの雑誌に書く積りで書いて見たのですが、それは「古本屋」に就てどあつて、本屋はなか／＼大切な役目をするものであります。書物屋の店頭に行つて教へる事が少くありません。絶版だとか、異版とか、誰々の書入本だ

とか云ふものは圖書館に行つて、貸出掛などに聞いた所で分るものではありません。さう云ふやうなものは書物屋に行つて知るより外に方法がないのであります。私は或る時代に病後爲すこともなく朝飯を了ると、池の端の琳琅閣へ出張したものです。そして晝飯をそこで喰つて終日書物を漁つたものです。彼處は座敷があつて、丁度倶楽部のやうなもので、其處に甲乙丙丁が集まつて雑談で時を費しましたが、實は彼處で目新しい本が出て來ると、眞先にそれを見て、その優先權を得たのです。そんなことが毎日であつて、それで大層興味を感じた譯です。色々な人が打寄つて書物の話をしますのです、それに依つて幾らか教はつたこともあります。亦琳琅閣の主人も毎日さう云ふお客が行つていろ／＼の話を聞かされますので、主人も段々學問をした譯です。随分客よりも教つたに違ひありません。或る時金欄表装のお経がありました。それは良辨の書いた紺紙金泥經で、西村兼文の模造したのですが、

の松尾書物味と夜行するグロム社で夜後
分を催し此の夜行するグロム社で夜後

たこともありましたので、名所圖會を披てはいろく
発明として呉れました。その説明はウハの空に聞いた

同じものを三千圓で、井上侯爵が買つて居られると云ふ話を聞いて居るものだから、好奇心が起つて幾らだと訊いたら七圓と申しました。何と云つても七圓位の値打はありますが、少し譯があるから三圓に負けて呉れと私から申しました。元來私は負けて貰ふ事は好かないのでありますが、さう云つたのです。すると老人はどう云ふ譯か分りませぬが、毎度御厄介になつて居りますからと云ふて負けて呉れました。私は是が三千圓で井上侯爵に行つて居るのだが、俺は貧乏だから千分の一の價で手に入つたと笑ひました所、老人も成る程と云つて居りましたが、さう云ふ事があつてから或る時又行つて居りますと寫經が一つ出たのです。其の寫經は天平の變りものと思つて買ひますと、或る時博物館の黒川眞道杯二三人が遊びに来て、是を見て、これは大變なものだと云ふ、そこで博物館で研究して下さいと渡しますと、それが白鳳經であることが知れた。其の經の來歴を申すと法隆寺から例の田中伯から

早稻田大學が頂戴して、此の頃國寶になつた、皇侃の禮記の義疏と同時に出たもので、琳琅閣主人もそれほどのものと思つてゐなかつたのですが、日本最古の寫經で國寶となるべきものであります。私は之れで喜びましたが、馬鹿なことにはそれが私の手を離れませんでした。今は故人になつた私の友人に小川爲次郎と云ふのがありました。安田さんの御厄介になつて大阪で仕事をしていた人であります。此の人が切りに古寫經を集めてゐました。私が行くとき自慢してそれを出して見せますので、よせばよいことに、私が君は天平經位を珍重してゐるやうでは、まだ乳臭を脱しないと大言を吐いたので、小川はどこにこれより以上のものがあるかと申しますので、差當り俺の家に来て見よと答へますと、君の家にそんなものがあるかと云ふて間もなく東京へやつて來ましたが、今の白鳳經を見せると成る程と云ふやうな譯で大いに感心したのです。そして法螺を吹いた崇りて到頭それを持つて行かれて了ひまし

た。そんなつまらぬ話もありますが、私が大阪へ時々参りました折、ある時鹿田の店で、藤井竹外の詩稿を得たことがあります。これは三十六家の詩人の評の入つてある草稿本で、自分は初釋時代に竹外の詩を愛誦した關係から、食指が動き、それを手に入れて嬉しく思ひました。私はいつても會心の書物を買つて家に持ち歸へるとそれを珍客と呼んでゐます。夜分などは其の珍客を寢室迄伴ひます。珍客を寢室に伴れて行くのは書物以外にはありませぬ。話は戻つて又琳琅閣のことに成りますが、或る時可笑しい話がありました。琳琅閣主人が眞面目に毎々御厄介になつて居りますから、今日こそ何か獻じますと云ふのです。それは有難いが僕は貰はんでもいゝから大學の圖書館にやつて呉れと云ひますと、それではさうしませうと、薄葉の群書類聚是は五六冊足らないものでありましたが、それを呉れました。内々譯を聞きますと、前日朝吹(英次)さんがお出になりましたので、コンナ安いものがありま

す。早稻田に御寄附になりませぬかと申すと、幾らだと仰しやるから百圓と申しましたら、直にお買ひになりました。と云ふのが本音であつて、人の財布で私に義理を立てたので私も笑ひました。琳琅閣主人は妙な男で座敷に行くと桐箆があつて其處にいろくのものゝ仕舞つてあります。是は賣り物でないかと云ふて中々見せないのです。毎日行く客は何か寶物があるに違ひないと云ふて、見せろくとせがみましても容易に見せません。到頭毎日行く關係から私の見出したものは、白石の草稿が出て來ましたので、私と狩野君が買ひました。此外に何んとしても譲らないものがありました。それは狩野極齋の二顆の印で一つは藏書印ですが、これだけは何としても譲らない。何でも構はないから、自分の考へるお客様に上げるのだと頑張るので、その意中の客は誰れか、中原の鹿は誰れの手に歸するかと競つたものですが、それが幸に私の手に入りました。先刻蘇峰先生のお話にもありましたが、名家

の松尾書物味しと夜行するグウクトム社で夜行
公を催し此の晩年十二月

同じものを三千円で、井上侯爵が買つて居られると云

の印が押しであると書物の權威が高まるので、私の所へ動々もすると核齋の藏書印を捺して下さいと云つて来るものもありますが、それは止せ、私は捺す事は構はないが、どうもさう云ふ事をやるのはよくないと一遍も捺した事はありません。また琳琅閣主人に就て、ありますが、なか／＼妙な男でありまして、或る時大部の寫本禮儀類典を買つて来て、いつもと違つて先生どうも済みませんが、之を買上げて下さい。代金は今年でなくてもよい、三年位掛つてもいいのですからと云ひます。幾らだと云つたら五百圓と云ふのです。其の時は早稲田も貧乏時代で五百圓の支出は容易でなかつた。折角三年位掛つて拂つてもよいと云ふのだから買はうと云ふので話がつきました。そして暫く経つてから行つて聞いたのですが、幾らも儲けてゐない、十圓位しか儲けてゐない。どう云ふ譯かと段々聞いて見ますと、何とか云ひましたね、さう／＼稲田政吉と大いに市場で争つたさうです。其の爲に百圓ばかり餘

たこともありましたので、名所圖會を披てはいろ／＼を引こに見えました。その説明はウハの空に聞いた早稲田大學が頂戴して、此の頃國寶になつた、皇侃の

計出して琳琅閣が買つて来たのださうです。併しそれがいつまでも店に轉がつてゐては自分の顔が立たない。右から左直ぐに片付いた所を見せたいと云ふので私に頼んだことが分つた。琳琅閣主人は俺れの男を立て／＼くれたと云ふて私にサン／＼禮を申しました。琳琅閣とは深い關係がありましたので、齋藤の葬式には特に臨んだやうな譯です、私は一向本は分らないのでありますが、本を好む事は色を好むより甚しいのです。(笑聲)

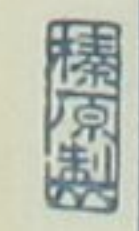
庄司 大變結構なことをお伺ひ致しまして有難うございました。今色々齋藤琳琅閣の御先代のお話も出ましたが、一つ、こんどは吉田さんに淺倉屋の御先代文行堂さんの御先代、村口さんのお話など、名物本屋さんを一通り御紹介願ひたいと思ひます。

吉田 私が今の淺倉屋へ参りましたのは十七歳の時でありますが、其の時には書物問屋と申しまして、出版屋さんと同じで、店には珍書がございませんで、小賣

○是は吾の友が江海行政策として刀狩をやつたこと
而もいふ事実はあつたが其令違つたの如きことある。

條々

- 一 花ふる姓等刀、ワキサレテ織袍等の武具の類は持てる事固く令停止候。其子何者不入者具相替く、年貢所納を難滞せしめ、一揆を企、自然給人の對し非儀の働を多し候勿論、抑成敗あるべし。然し其所の田島令不心、知行つゝいゝ成り候、其田主給人代官大也。一 右取置かす(キ)刀、ワキサレつゝいゝとせせ(キ)儀、あつた、今が大佛御建立、釘、カスガイ



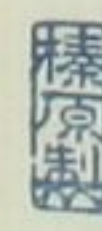
に被仰付へし。然し今世の不及申、来世は百姓おとしある儀なり。

- 一 百姓の者具を好す耕作を考へ候へば、子孫と長久の候、百姓御安わぬを以、此被仰出、是回出安全萬民快楽之基也。果するも、唐吏の其め、此方を守り、法其政を存する姓の者、業、物を入るべき也。

大正十六年七月 御朱印

こゝに兵農分離の一史料もあるが、亦其方、寺建主を移り、私兵の兵を徴せしむの切ある揚峽と云ふべきである。

○近海に於て新門に於ては、但此一日敵軍
中の不足は、猶ほ其の多し。是の時、以て我が
軍の爲め、行かば軍隊進化行列も、其の
ど、あつた。十五日の時、其の自働車に乗
た、其の上、利くと相認する側の人、が
列して、旋遊し、此の利くと、其の
際下の御も、御の
か、あつた。この合つた、何んか、
り、七判り、重なり、其の流るる、
の丸の内、進出、其の
る軍隊の一隊、が、口、
進んて来り、軍隊、
主役の旗、も、
み、擬し、一隊の士卒、
を、
て、先づ、
現、
ん、
れ、



只此ハ武具也、其の、
剣を帯ひ、陣笠を冠り、銃、
ら、見ると、定、
七、五十、
の、
て、
ト、
ハ、
つ、
あ、
欧、
化、
し、



軍隊進化行列

軍部感謝デーの催し
 名馬二十一頭の軍馬行列は夜が皇國の國旗を連ねて
 戦後最大の盛況を目的をたのむと見せしめ、二百六十九
 名馬二十一頭の軍馬行列は夜が皇國の國旗を連ねて
 せし軍人の奉は過去幾多の戦役を記し出されたこの日
 行列は十五日午前十時日比谷公園の集合場を出発、伏見、鳥羽の区から江戸へと進出し、来たが軍
 馬二十一頭の軍馬行列は夜が皇國の國旗を連ねて
 戦後最大の盛況を目的をたのむと見せしめ、二百六十九
 名馬二十一頭の軍馬行列は夜が皇國の國旗を連ねて

昭和十一年

ともあり替りかよも模擬さるゝおれ。勿論海軍七かいり、
 模造甲艦三三陸奥、その他、車引かんを行く、東
 郷元帥の擬し、きき大砲が金色燦爛なる大礼服も
 着け、まが幼車に乗るゝおれ、さか、滑杖を免か、
 さか、つれ。海軍の陸軍隊中、さか、陸軍の騎兵隊、さか、
 式町も海軍の行進、行人の目を惹き、多くの自動車
 の行進を停めて、送車、行列と見た。此行列こそ、松魂社
 の行列と、さか、さか、さか、この社の階、に群衆の迎へて、お
 譯か、分つれ。断る、偉い、式、万人、人、を、さか、さか、さか、各、
 各、代、の、兵、兵、軍、隊、が、を、さか、さか、さか、さか、さか、さか、
 さか、さか、さか、さか、さか、さか、さか、さか、さか、さか、
 の印刷、命令、おれ、さか、さか、さか、さか、さか、さか、
 徒ら

事のあけくしと赤字のよ出るこことと願ふ。果月
今とよの職員の体をもつてやうに急ぐと速急の
實を大すけのうらむれのかとながら漸やく是の交
かありて今と協定するやれ年しつとて言ふのよめ
こころを就て先づ四合社の社長か互ひの世帯同
しと都下の旅社の大さうよ十社を訪問す
しとましてきんも自から是を告し二日又海
各社を訪問しこころ各旅社社の展望が出来
た。實に旅社社のあつた此の訪問の受けのよ
るいこことい取の切つたこととさうも四社の社長自
身の訪問のあつたから各社も不在なるの限り社長
自のから出る。粗略さうして應接した十社十色か



を待たうと皆果つてみる。中よい言葉巧みに如
大さうと挨拶のしとて女の実意の測り難いよめあ
つた。亦弱いよめばかりを苦しめると困るよめとさ
れよめあつた。随分内実旅社社名の競争の
激しと困つてゐるよめとさうも漏るよめとさう
た。印刷今此の競争の考の價が倍とほしとさ
あつた。旅社社の附録をつける競争は固しく
困つてゐるこことい。若山可らくこことをあつて。此のあ
るとよき考の口柄もさうも得るよめ。一方の紙の價が昂
かり亦今印刷代が昂るとさうと。旅社社前巻の紙
も七割もあつたよめ。何んか困るとさうよめ自然
旅社社同士の間。附録競争や紙價倍高の競

筆を後におき協定が成るべき筈である。是をやらす
といつても執るべきことあるが、恐らく共倒れの非難に
陥るであらう。印刷値上げも此致に於て彼等と別
振の援助を為すことであるが、此致乃ち彼等をして
協定の機会を得せしむるの如いのである。協定がいつの間
か本佐の物の附録二冊を添けて五六十枚と云ふ打
場が極つたの一言を奇観ひあるが、之れは就て感す
ること、利産協定果して此も資本主義のゆかり
着目取をもち、點で、大なる資をを捕するものなる
け、利産主ち切らぬことか、今、歴代と現へんて
ある。尚ほ多くの協定社も、振して見ては感したること
ハ、人物上尊敬に値するやうな人である。少くも、

藤田

よく云へ、立志傳中の人と云ふの、(ト)よくよく、悪く云
へ、山のともそのべき人、又ひある。あの人の曾つと、こ
の職工、あるところ、この者、観ひあつたところ、どこ
社の編輯費、あるところ、この社、借金があるから
今、いつて、其れを忘れたことか、まふ、振ら、款ひ、
立派な社を構ひて、あるところ、社長の先輩、の切
つて、丸い、日、あるところ、小室を、借りて、社業を、おこなひ、
ありして、其間、の、頗る、妻(室)の、あることを、感した。
兎角、街頭、出て、其れ、人、に、接して、見る、いけん、何ん
七解、の、二、河の、歴代、の、吾等、の、何ん、か、を、教く
て、造、番、ひ、ある、ところ、思ふ。 一月二十日録
○一月廿一日午後、二、僕、ん、て、出、遊、日本橋、三、城、

此を昨今陳列中の名媛人形と今上り其の中身新
と親る。諸家の珍物と可き。唐沢の區域に渉つて
借り集められたりありて、常々其の容姿も又其の
出陣さんせおのり。或は天子の御座に係る。某貴族の幼
時手撫のこの、さきまゝ了歴史のよりの此の藝術
以て、貴人さきまゝ意味あり。概して名人の心多
且つ形ハ玩りともいふる。貴族の御座に係る。此の
多き為め刻々大さく、裸人形をいふ。毒人形大のよ
おのり。時代におおなるきまゝありて、別々時代の
此の左にハキキと、女の表飾の如何にも生彩あり。こ
も、斯る藝術士若し、の今上り優るの感と抱かし
ま、あつた。一七五七思慕の情にまゝ、此の心

標

ハ精巧ハ精巧なるも大切な物種を録する。似たり此の
陳列ハ玩具中特々人形の陳列をん。他ハ玩具を
陳列せん。あり、人形の尤品と上方の製を才一推し
る。おのり多し。上方産より大形種をハ。類とハ
あり。即(一)衣索人形(二)湯沸人形(三)ハ民人形(四)
湯沸人形(五)木彫人形(六)土人形(七)雛人形(八)雜
類。各品ハ其の注目をかく。愛おしく、鑑賞
しつ、軽く歩を移す。の間に言ひ難き。誤あり、
其の考は、時をばり。や兒女に遊ばる。かの感あり
なり。尚ほ此の陳列中、一、再々鑑賞を勧めすと云
ふ

神置物
 合
 一番
 像
 中川政七氏藏
 砂
 郎
 吉川觀方氏藏
 藤紋木彫
 藤紋木彫
 玉井久次郎氏藏
 形
 笹川種郎氏藏
 (童子及童女像)

赤地三重櫻の丸上紋衣 (嘉永二年伊藤久重作)
 緋縮緬地櫻柳の丸唐草縫紋衣
 牡丹ニ菊紋紙衣
 納戸織物衣
 松藤縫入彩書裂衣
 緋縮緬地鳳凰切付裏紙衣
 紅絹地花丸彩書
 緋縮緬地橘縫取衣
 松竹梅尉姥彩書薩摩雜
 牡丹ニ松梅菊紋紙衣
 共冠緋縮緬地櫻に霞彩書衣
 加多神社御護御雜
 這
 治郎左衛門芥子雜一對
 針人形雜御殿 (十八體立)
 天
 緋縮地松に藤縫模樣衣
 萌黃錦雲龍模樣衣
 緋縮緬彩書衣
 芥子紙雜松に藤彩書衣
 十二單衣裂地衣
 紅有織裂地衣
 縮緬地松に藤彩書縫入衣

- 一、雜飾 東京 小首孝次郎氏藏 (樂田是眞筆)
- 一、立圖 東京 有尾盈子氏藏 (眞光筆)
- 一、同 東京 駒崎玉造氏藏 (柳原榮藏筆)
- 一、春 東京 嵩谷筆
- 一、紙 東京 平尾贊平氏藏 (英一蝶筆)
- 一、同 東京 西澤笛畝氏藏 (橋本雅邦筆)
- 一、雜屋立圖像 東京 井口春久氏藏 (長原孝太郎筆二枚折)
- 一、張子人形 東京 勝山岳陽氏藏 (東京美術學校藏)
- 一、人形繪衝立 東京 東京美術學校藏
- 一、玩具集覽 (卷物) 東京 佐野平六氏藏
- 一、遊女弄玩 東京 浮世繪 江澤榮魚氏藏
- 一、五節 東京 晴風筆

「御出品多數のため會期中陳列替を致します」

〇早稲の大畠、入世してゐる親類のち年見方か
 年如こ来れから半鋤を出して藤千入飽念いせし
 めた。ちや年一節にこんどを去つたの無入、お出
 づき葉にそのと四に取つて出するし鋤を充て
 かつて藤千入若につかき所、彼等のまきびかあ
 る。自分も思ひし時半鋤をまき入れ、下千入西洋
 料理又誘ひのころし半鋤が賛成であつた。自分、
 彼等が我々目前に飽念するのを見ても、決して半鋤
 を持ち切つた。大隈侯が書生時代の長崎の下宿屋にまき
 りの半肉と云つたのころ、その異臭を不宿屋の主婦に
 思ひ込んだ。侯は思ふことゝに着るゝぬ衣所を従
 せしむる。思ふことゝに着るゝぬ衣所を従

80 70 60 50 40

名寶人形の會追加目録

Table listing various types of dolls (e.g., 衣袋人形, 御所人形) and their collectors (e.g., 池田金太郎氏, 西澤清三郎氏).

Handwritten text in vertical columns, likely a commentary or introduction to the collection.

Handwritten text in vertical columns, continuing the commentary or providing additional details.

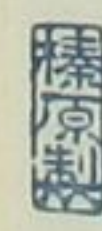
俺も喰つて見たい。どうか肉と料理番を客帳とくんと
候に頼んで干飯（干飯）が今も大隈家に残つてゐると云ふこと
が自分の牛肉後の冒頭にある。自分より更に書生時代
を追憶しての流日八九年頃の牛肉七ありといふはあつた。
一人前上座位をあらうた。あらうたつて十歳位はあつた。
勿論肉の質は、今よりもさうさうつた。ロースとかヒレと
が肉と區別をいふ無つた。大概三人前乃至五人前位を
平らげた。煮物の外は焼くこともあつた。焼く肉は
聊か上等であつた。当時牛肉店に利を度あつた。ステーキ
せんが書生に満ちてゐた。牛肉をあらう書生はあつた。
い割賣店にあらうつた。料理が簡單で價が安い。蒸
煮を呼ぶやうな面倒も無く誰れも遠慮もさうしなく

明治

五々鍋を國人の論議をやつた。如何も陽氣のこゝろにあ
つた。誰れもが書生時代にある。さう時代は牛鍋の味を知ら
ぬもの、恐らく一人上あつた。日本の文化も半世紀の間にあ
らうべく進歩したが、考へて見れば文化は牛肉をあらう不
が餘程あらうよがある。當時存の藝大の人の牛肉
をあらうことを思ふた。福澤先生が進歩派であつたから勿
論牛肉を好む人が、さういふ人相映吳二と云ふ人の後、進歩
といふやうな人が、最初の無藝家が先生が牛肉をあらう
を思ふが時勢を企ててのことであつた。當時開けた人開
といふやうな時勢を激しうあらうた。牛肉をあらう人が
あらうことと開けた人の一特徴であつた。西洋の芸術をする
書生輩の牛肉をあらうた。金州である。牛鍋をついて

ろくろ文化を揚り出したことも決り七少多のいとい云いん日ま
い。吾々の因心なきまゝ二十人位生きたるのみが、皆ある世界の
赤宿の日本の文化の貢献したるものがあるが、特に日書生時
代を思ふ為め牛肉令を借すが、皆七十以上の老人が
流れた牛肉をよもやらぬ、二三年前の牛肉令のハナ
集まりのオオサキ人前合つたことがある。乃ち一人が五十年前
合つたことゝなる文化に於いた此連中、今尚飯堂をた
てたりの頼もしいいふるのか。と一笑しぬ。

牛鍋とまゝの日本が産み出した料理法は、牛を食ふ
ことハ西洋から教へられた。えんを鍋で煮、銘々湯干
煮とやらは流し日本の發つたもの。今、おんとするやうに、英世
侍士が日本へ傳つて来た時、自分の落合の別荘に掘き



野口を大いによまぐらへセルの、彼人の好物を饗したから
あつた。野口、毎日、毎週、地方の饗應を交へたが、彼人
が真に好む饗應は、一夕七あつたらう。目今、
別荘に、彼人の他所へ合はんまの好物を供したから、喜ん
だのも道理がある。葉ふとも、焼芋のホウ、こ息
の江戸のを大皿に盛つて出し、酒の下物、麩の卵、
を出し、そして牛鍋を供した。この三つ、この彼人が長
い洋行在外の間、あつたか、あつたか。牛肉ハ西洋の
勿論あるが、牛鍋は、自から箸を執ること、郷土
に限ること、彼の満足を描いたのも道理がある。
その懐舊話も出た。
彼等も年ハ秋と、私、活活を以てきる。

去きう。食へて喰らうておる。自分「椰掬」かつて、吾等
七十箇の七五人前を^味味つけけるるる氣がある。吾等二十
人前位味つけ給へるるまゝ。吾等「横」をみるから分る
まゝが、牛「揚」で自から煮て自から合ふ自流的料理
「二」種の風味がある。えん「自分」の意を込めやうん
「横」揚「す」の味がある。辛けん「甘」くする。肉の半「煎」を煮
ぶ人「も」室「に」元「上」けて合ふ。野菜を好む人の多く
野菜を投り「こ」む。野菜を「い」ろくある。大「焼」の子
やを用ひるが、豆腐や松茸「を」も用ひるものもある。
「す」べて自流的から自分の好む通りである。そこは牛
鍋の味があつた。煮「し」て肉「を」を「四」つ「つ」つと「五」
つ入口「へ」移すの味がある。愉「快」もそこである。牛鍋

牛鍋

で喰らふと氣量に肉が合はぬ。味も味も分り侍ふから
である。西洋人七牛鍋の感想「し」てみる。さうだ
か、恐「ろ」く西洋人の日本人の牛肉を多食すること「驚」
ろいてみさびあつたと思はれる。牛鍋「に」投する肉を
形「を」小「さ」るん「だ」だ「だ」だ「だ」だ一人前と云ふ
は、十枚乃至十四五枚ある。さうが、西洋人から見たら
日本人は「ビ」フ「テ」キの多食者だと思つてゐる。さう
五人前も牛鍋を喰らふとさういふ量に於て「正」しく
五人前の可なり。大「き」な「ビ」フ「テ」キ「を」近「敵」する。ビフテキ
「は」ナイフ「で」前「つ」つて喰らふのが、牛鍋「の」細「か」る肉
を煮て「ビ」フ「テ」キとする。煮「て」あるもの「を」自
分「に」一「つ」つした。

臭みの赤粉卵を割る肉を美こつけと云ふことのみを
さくしと云ふは牛肉牛肉の特味がある本肉の
肉好い成る持味をさぬやうするを鶏卵の
を肉のつけこことをせまひあかし善通の鶏卵は牛
肉のつきよか、往々肉の中へブチまけて肉と和して
喰ふことかある。是れ就て自分の所感がある。玉子を割
つてかき回らさう其儘粉く投りこも、黄色の知
をアルビエーメンかえり捲く、アルビエーメンは所謂の白
味、こゝは黄白の對立をえ、か、昆布をこを何んとい
ふか、人種は蟹くんの黄味と吾々黄も人種を、白味の白色
人種である。白色人種は無濁の感張つておるけん、
玉子の坊へてるん、本体の黄味は滋味合もこ

標

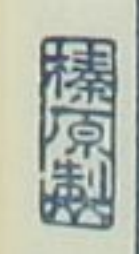
有り、白味の帯に本体を保護するもの、湯きぬ、あるが
故に性々白味も棄て去ることすらある、いかに、
産白味の黄味の從属であることを思ふと、白色人種は
卵と産卵もて空感張と味め、なんど、人種論に入
ぬ、牛の産地は法が移り遂に其時牛の法とあり、
自分の先年、ち、冷に、ぬく、獨一の行を、成つた大観
摸の房教物をえ、勿論此時は日本の千、属して、肉の
入口も不道の供養塔が、運んてお、こ、か文化の、
あり、房くんと、牛の、靈魂を、祭、こ、と思、あ、一滴、
なきを得、う、た、ま、菜、物、の、房、教、物、と、冷、房、庫、と、
成り、房教の、坊、の、保、持、を、う、か、血、潮、の、海、渠、を、流、れ、
ぬ、思、ひ、の、い、ま、の、あ、り、た、冷、房、庫、の、い、ま、の、大、き、ま、

牛体を半截うしよが武十と云く帝さんてあうね。まて
坊の牛肉固有の真氣を以つて充さんおれ。大概の人の
此氣を汚るゝ真氣が鼻より一日に飲公が出来よ
とよけんじ、自今やうな牛肉好ハ寧ろもう真氣を
まてい旅後物づくを直らぬ肉を神聖と満喫せん。
○セークスビヤと妻のアンナ、ハガウエーの關係を
神くもえんことなるいかに、ジョイスと云ふ人な依つて
妻をせんれま事又ハ據ると、シエークスビヤはま
少年時代にも廿六歳でちうれアンナ、ハガウエー
の藝のやうに廿の内の香んらうて、ライ麦の畑の中
で口説き後せんれとある。こんな事んまぢあんな畑中
の野合ぢあう年上女の誘ふにである。がジョイスは何

標高

んと云ふてあるかと。考へるに、若い時二年の上の女から
征服せんれ男のいはい、
眠つてあつたれ耳から茶
を注ぐんれやうなもので、まゝまゝ死な、けん取ん
いと云ふてある。此沙おの多分此の妻と困らせんれぢい
あまの、二十年も妻と離れて英京に旅立つてや
つたさうい女問の酒心が在らんといひもなるらう。や
も此の二十年間の留守中にハガウエーはあぢい
の事と通してあつた。と云ふから随分の淫婦ぢいへる。
○此頃及べ大坂毎の茶屋あり、此本山彦一の子息
ハ大坂で本山家とちう知ん、子者の子と云らん甚しきち
呆痴と云ひ云ん、父さう人も食う此の息子に困つたぢ
獨り子の嫡男と云うんをさめも、難くほつて

るが女性美を補足とする内この意味もあつて此の衣裳の相も高麗の便を拂ひ去る細作姿の女が幾層も向つたり上着を脱いで姿を露するものがある。これに就しての圓面のまゝの姿と思ふは細作の日本人のまゝの姿であるが西洋人のまゝの姿。日本人のまゝの姿を婦人がかんとを看るは鬚の曲線が肉のめくやうの感もあつて西洋婦人に寸尺寸寸と細作の細作を脱つて着せても到底やさしく見えぬ。勿論曲線美をどこに弄ゆても又くよしくもあつて。あの腰の尻の幅の度々い。かうしてやうに体格も、広伸が自在である。とこより行く日本女の婦人が七未しとやうとさうか能く見えて起つて進止の婉曲であるやうに育てゐる。舟の軟かささうも曲線美



を脱いで相違するやう出来てゐるから去る細作の相も日本婦人が用ひてゐるものを脱いでゐるやう出来てゐる云ひ得る。衣服は自由な曲線の性をあつてゐる。此等の曲線は一月廿六日○自今が當我廻屋の劇を見たりの十数年の間にどうも卑俗なところの所へ舞臺のさういふのと流石さうかすかゝる外にいとあつたが●碎る工モアを脱ては日本有数のものだ。流石さうも可なり彼が工モアを脱けてゐるかと思はれた。全体流石さういふ名譽地は素人も好んで俄かをやつたかゝる。當我廻屋のことさき其劇の出すのには不思議い。こんなかゝる此人の素性や歴史を少しも知らうれば、此夜最後は終つた。

この如くあることを得た。まじりくおちろい里がある。彼も
本姓和田久一で本年一十七歳とまよふ。前金のある男
也。彼人の父、亦復士であつたが、彼も六歳の時に死し、彼の
の祖父の手で育てられた。彼の祖父は、津因寺の住
職で、然るともなは、彼人の坊主の時から、mit 入道、
から雷任や戒名をいふのことも教へておつた。寺で美由是
ぬまの受入工をとり、此の坊主の祝儀が大いなる受け
た。あつた彼人の坊主として津因寺の住職を継ぐやうな
ふいふさううた。此の坊主切少の時から芝居好きで、
か法義と小料理屋を始めた。就ち、寺を罷りて大次
へあきまんから時々芝居を親の横へを得たが、其良
高井と云ふ家、下雅とやんたの十四歳の時、此の勤

徳和

め芝居の家の細長か芝居の坊主であつた。あつたお付を仰せは
けん、物つと来たこと、その翌日、家中のものを集めて、
来たるやうも演じ、芝居の真似を、此のころ、三年續
いて終るまで、家から後者、まゝんと勧められた。彼人、
内々抱いておれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
飯後、中村珊珊、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
間も、母の死んだ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
をせり、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
る旅後者と、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
るモリトール

一正ん、先づ人の御慮、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
人、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、

ニ 先か不可能なるに九のうくしてさしぬ人間さうたい
この弟二のモフトーかどうやら幸せうんじやうじあるが一時休ルン
べに境界の地分人の形意さうんじや併し旅役者時代播磨の
役者むかえ支三やうのたぬまとい名(三人)とまかあう、是れ三
年程一産しちうにのが北男の古妻の終業時代の、是れか
所しち大改り来る、お時福井産むせ形ん中村時代とまか
あつた鉛毒に困んじ病業せんとするのせ引とめて、當我西
即座を形つてうらむつた。久一い當我五印の隆漢本を漢
ん七感さうすかあう時代、五印の名を呼んでじんを女印と
して存する、當我の名を附しんじやある。十印の隆漢本を漢
たかこの方の隆漢本式を附しんじやある。十印の隆漢本を漢
隆漢本を漢附しんじやある。十印の隆漢本を漢
當我のんじやある。十印の隆漢本を漢

〇二月廿五日今朝殊に寒風を感ふ掃煙半日句集川
柳をいも通り流し、中へ往々今心のよあう去来が
「唐りといくどくや、雪の門」さうい、雪を感ふ人
おとつんじや経流のまの、今ゆし難い句ひある
雪は寒きんじやと、是れを感ふ、さうい、徹しんじや
よのひある。雨系といふ人、あまの子の句ひ、あまの子く
顔を祝けはさうけり、あまの子の面う、掃煙目
鼻が、意んじやあまの、此一句平が掃煙子のあまの
進海すべき、あまの、大隈を道のかね、田の面う
我つて、さうい、あまの、人の心、かぬま、誰んとかん心や
こんの、田の、家を、あまの、人を、見、さうい、誰
んやんと、さうい、笑況を、祝、さうい、さうい、おせり

○中林梧竹、彌後、遊ぶの日久しく、余が就成の家、有る、
 良寛の碑文を書き、此時、左、揮毫の傍、傍人
 に語りて云く、良寛の才人、往々、後、困る、此人の碑文
 を書く、難解の字を遣はさる、可なりと、其碑、今日、長
 巻、大山の庭、是
 にも、
 各休の才、通る、
 にも、
 体のこと、とき、ハ
 良寛、
 こと、
 或

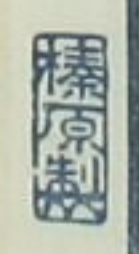
○東都谷村、大、
 舞、
 七、

○東都谷村、大、
 舞、
 七、

二五 中林梧竹詩書
 (紙本、竪四尺三寸五分、巾一尺四寸五分)
 比叡山中寺。登尋踏白雲。午天鐘磬靜。貝葉落紛々。
 梧竹

○東都谷村、大、
 舞、
 七、

悪罵連が多いから其の言の不尽をあらうの傳速記せしめて
ハ、著者の感傷を換ふこととある。去んかといふ遠くを對
面してハ、切の批評を得るというところの、諸氏著
の名を甲乙丙丁と呼んじ、其名を、現ハさすといふ
申合ハせし速記の書法也。諸氏にぬめつこととある
也。
自今ハ、僻類に凶凶を並べへき傾向といふことも十八世
述べて、意見を総叙といふ。其の各種の商店日か宣傳
の方便といふ高なる目録や解説を、目お申目主流とい
ふことが行はれて、このが為の、意見を構へて、い傾向のあ
ることといふ、漸やくを著ライブラリヤンのカタローギン
の領域に侵入して、て来れ一徹いあることとある。



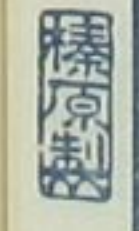
現象である。尾ゆひふが肝煎をやつて三載、其時
の異服目録をひり、之を「ひも世後」と名づけ、頃々
の、その著者、高なる目録と、思ひ、比か、入る、その
よ、の、甘うにある。羽磨をからハ、歯の潤する、ある、
ことを、輯りて、い、草」といふ書と刊行して二三冊の
も、及んじ、お、か、ん、も、勿、論、宣、傳、と、あ、つ、て、書、物、の、後、の、遠
い、不、か、ら、も、往、々、宣、傳、の、為、の、書、物、が、書、行、せ、ら、れ、
位、比、から、書、物、の、宣、傳、と、い、ハ、相、南、の、研、究、と、い、
書、目、比、の、書、物、の、味、を、潤、す、る、諸、氏、の、書、物、の、刊、行、と、い、
の、い、怪、し、む、と、い、ふ、或、ハ、何、ん、の、化、念、と、い、ふ、と、同、方、に、潤、す、
著、述、を、あ、る、書、店、から、書、行、せ、ら、れ、何、れ、や、願、望、に、配、つ、こ、と、を
と、進、行、し、出、し、て、来、れ、る、地、を、信、念、に、批評を、試、み、

うらみで、佐伯の自由と認めろい積る日本に於て千うら
ふと云ふこととき又希むあるべし。多分一行も大い日特
の所があつて、故に書画の心を回くも信じたので
ある。後あやうなるべしのである。

の例をうらみ散策に出るべし丸のい入ると、橋上書林
の即長今が聞かされておれり、入つて見れば何一つ買ふべき
よふ見ゆらうなり。但し場を去るとよるときも、物名
相の画人甚村と云ふ巨冊が横にそのおれり、披いて見ると巻
首は貞々、懐かしい絵がある。まづ絵の房は、燦々
と輝くゆつた。此者は大正十一年出版さん、三版
と奥付のあつた書だ。物名相の目録の書をおの画板十枚
を復知し、同人が数冊、著しに甚村の信や感想を記し

よふ添つてある。物名相の作者を著し、その著しに甚村の
係ある地方へ出張してその心を逸る、まゝと於ては、佐伯
家を訪ねて、材料を逸るべしとある。其書は自分の家
にも訪ひ来つて甚村の画があるべしと云ふ。佐伯の
家の架中、何れも無い。唯此及故に歎するものか
一幅あつたので、まゝをとり出して見せられたり、おせり
いとうめて借丹を消ふる任かして、持ちつた。まゝ後、返幅を
得れば、さて自分の懐に、そのが書まふべしと云ふ。持れそ
れがどう彼の著述、看入んてあるか、只後物名相の今つ
たことが無いのか、まゝ知んずれば、此の冊子を解
めて初め、まゝが巻首の標書名下に収めんとするの
で、初めたいとんべし。この物名相と云ふことを、

つ比。此の及故は、従来の考りも木版印刷に附して野菊の俗に
あつて、彩色の附して木版印刷が刷りから回つて来たのを、甚
村に見て、繪の具の清潔さを、甚村を嗜して、後白の野菊
小言をさへて、其教に、あつてあるが、小言がさへひびき
らへ別、一月板平紙か添いつて、さへ、小言のあつても、
き、さへ、その趣、その名もあつて、比が、偶々紙の大き
が、同じであつて、比から、甚村、さへ、一板、さへ、所見、
し、比、其内の板、正樹、比、け、板、板、板、の、巻、首、に、収、め、ら、れ、て、あ
る、比、尤も、此の、画、か、誰、か、の、不、意、に、あ、つ、て、断、つ、て、さ、へ、自、分
の、架、中、の、命、今、此、情、の、無、い、か、ら、若、し、此、情、に、自、分、の、眼
を、觸、ら、う、つ、と、比、何、人、か、此、情、の、由、来、を、知、る、と、ま、る、と、比、
板、の、板、の、比、畫、物、の、ま、る、と、ま、る、と、不、意、者、の、名、か、あ、る、と、ん、の



又、不意者、の、名、を、知、る、と、ま、る、と、一、所、の、及、故、は、過、る、は、う、と、び、
自、分、の、不、意、者、を、ま、る、と、ま、る、と、い、う、か、巨、匠、毎、村、の、故、意、に、板、を
あ、つ、て、細、心、に、あ、つ、て、比、の、心、志、氣、を、知、現、の、ま、る、と、ま、る、と、比、の、所
の、及、故、は、あ、つ、て、ま、る、と、ま、る、と、一、所、の、及、故、は、一、所、の、及、
紅色、の、洗、つ、た、ま、る、と、ま、る、と、ま、る、と、一、所、の、及、故、は、一、所、の、及、
ん、が、思、ふ、と、あ、つ、て、う、か、自、分、が、比、及、故、を、特、に、元、り、上、げ、て、一
幅、の、板、を、比、の、所、以、ち、亦、こ、も、た、る、と、ま、る、と、ま、る、と、今、ハ
比、の、板、を、誰、か、の、手、に、あ、つ、て、あ、つ、て、あ、つ、て、あ、つ、て、あ、つ、て、あ、つ、て、
して、手、を、離、れ、て、其、の、溜、息、を、知、る、と、ま、る、と、ま、る、と、ま、る、と、
板、の、若、く、こ、ん、を、見、て、さ、へ、く、板、を、さ、へ、ん、と、あ、つ、て、あ、つ、て、あ、つ、て、
と、比、一、冊、を、比、の、比、澤、の、舊、板、の、物、を、再、比、の、復、比、の、復、比、
と、比、の、比、澤、の、味、を、感、し、比、か、ら、い、ま、る、と、
一月三十一日終

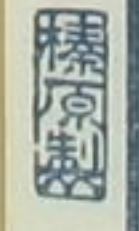
○坊久阿家山か、戦後の自分仰里たるく来た時の
郷の三浦東里が家山に睡菜と云ふみさを采
トする效能を説きし所の事を家山が喜ぶに
去る所の詩を心つて謝を乞ふた、その詩が保心
ニ傳ひつゝあるのを、能く保心ニ之れを刺せ不
謂く睡菜と云ふ、よふ何ゆあるかとも、阿久
ふに不、左の如き事を得た。即ちニツカレハ、或
はニツバオモダケ、或ハニツバカハホネ、或ハニツ
バハンゲるとの若かあつて、支那の説に、其根
を瀉法と一と云ひ、入らふと睡りを催すと云ふ
が、果して然らば、やんやん、ふらふら、との若かある。

○在京都祇園樂江卷石と述刊の畫譜一冊
を寄せしもの、得志の山あり多く此の冊、物のあり
巻石の面目躍如なり、予偶々病んで著しりたる
リ無聊の困むか、うう、辰親時を往ける傳
まが、大い、快色と名あり、卷石の年、中、忘、羅
リ、今とせ、く、近、院、他、原、め、有、染、ん、今、年、七、十、
去、斗、自、か、ら、碑、も、冷、西、の、帝、を、鳥、北、住、古、山、の、墓、域、
遠、と、せ、り、と、言、せ、や、り、き、く、か、今、此、画、冊、の、尾、に、記、す
画、の、伝、を、し、碑、面、の、工、へ、三、字、を、刻、す、と、云
ふ、予、故、言、を、果、す、る、間、の、富、志、を、見、り、染、ん、者、
ニ、ま、く、予、画、に、む、か、る、大、先生、を、得、て、も、亦、先生
の、も、ち、も、し、何、つ、て、自、か、ら、中、先生、の、印、を、刻

同版

して用也、工へこの碑、赤白から買ふ事をも人呼ぶ
べしけんとして、このものも、あつて、さうききと得んや
碑陰の拓本をえて、先かて、了、夫人、理、香、の、事、を
勤し、自家に刻して、さ、所、志、行、行、の、不、道、義、始、と、む
不、の、よ、を、名、に、し、工、へ、こ、巻、堂、流、傳、と、濁、浪、を、同、く、し、
る、ん、や、と、後、の、卑、も、死、日、後、を、思、ふ、て、屍、体、の、解、割、を
大、二、の、二、托、し、も、し、と、も、刻、す、中、忘、に、罹、つ、て、以、来
の、彼、の、の、心、境、を、な、べ、し、予、巻、石、と、銘、交、り、毎、年
押、書、一、二、枚、を、寄、せ、る、也、知、れ、ん、も、彼、の、か、得、志、の
畫、傳、を、見、る、に、こ、ん、と、い、ひ、初、め、と、す、辰、親、の、際
雪、洞、の、來、り、後、を、見、快、云、し、道、入、り、予、か、す、ま、
齊、し、寄、傳、つ、け、振、り、し、る、也、武、女、有、き、と、此、の

ハ一古きよふかちま。年輩の割合に元氏であつた
回外人の或る藝術に長じたりするところ。神をまもる作す
短かい。その天才の神を一時の天才と見えて
惜まらる。酒の味を見まじります。死から
爛漫の花を視るがこと。観賞院の酒を飲むに
かゝる氣をいしあること。時々自分か氣をい
つゝある。年輩の音楽者。日本の音楽各校の生人
稀有の天才と謂ひし。一昨年洋の命を
伸回ひ終業中。既、故郷を去り。昨年海難に
被害をうつとせし。愈くす。ゆゑに故郷を起り。と
いふ。ニアニストの。年や腕に故郷を起り。と



れを自らた。任用の去来ぬとあつたり。生きた甲
遊もろい。信心。商人の悲観の真。日柄に培くまの
かある。本折角一教授。仕に母校も大望してゐる
と云ふが。此人まじ。廿五六年の。洋行前告おの
為め。自分の家を這ひ来つ。此時アブサン。時を終
予の家。たすること。か。正を得る。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
某。此。迎へて。由。相。士。祝。比。意。意。の。前。柄。比。か。あ。ん
ん。此。古。年。一。四。後。の。記。り。る。き。や。此。人。名。を。江。口。基。成。と。い
ふ。
○此。以。丸。丸。に。骨。董。古。画。の。文。格。入。札。と。云。ふ。か。あ。り。し
お。あ。り。し。ま。あ。り。し。こ。も。あ。り。し。か。氣。お。り。し。ふ。や。う。し。の。の。
ト。ント。あ。り。し。但。此。稀。れ。る。玩。具。や。小。品。骨。董。が。あ。る。の。を

まゝに引かゝるゝ是を入る。四角形前指つたもの二
三の點がある。一は高砂のお壇のかた人形で、自分
の架の中へのかた人形が無いか、標をとり遊
ぶ。かた人形の特徴は改めると言ふことも及ぶが
自分の意をも通つたのか、人形二個其面をハメテ居
る面は先かゝる娘だが、んを元りまゝに可愛く
いふ兒の顔が出さうで、氣柔まるつた、尺二寸迄の
すのものがある。同じ高砂に木彫の二王がある、架
中へ二王があるが、揃つた方、尺二寸許のもの及び
共々根付紐透しの孔のあるか、おもしろくも
他の二王は根付でさうく直ぐにあるか、一基だけ
對して拵くもの、こゝも得たもの丈三寸許、一か

深田

揃つてゐる、餘り時代のものか物さうものか、架
中へ、架中へ、這つ、佛像、いくも千入る、二王
の割り方少すい。外に布代りの木彫の架物と支那
功五の架物が千入る、此の架物の楕圓形の功五
の基部の上は男女の人物が立人おん、立体のよび
男女椅子に憑く、よび中央へある、一方一人の男が女
杯をすゝめ、他の一方一男子が席を張る、ある
歴史的圖案にあらうと思ふ、か、考
かつ、

二月八日記

○宇和島の人久保資忠年一研を齎る、未
つて示さふ、山陽外史遺言、いふ、本は、自
若、蓋七附居、長り、端溪の石、七、刻七深彫

りよそ名工の干賦又く、山陽遺言と見え受け得んか
いふらうし、卷ありし詩をいふ南時觀記に於て
尺璧を字のせりか、蠶の刺を蠶と見誤りたりこ
と後に見り、今回訂正の書簡を更く見ると



こころをうらみ
言をいふ実物
遠かき小蛇の深
く削り込まん
さまじく又くせん
もこころを
おく

漢書

○上村玄劍 漢詩春秋と定むる巻

中前月並海に於て酒間の詩二首と稱す

相見如故春對樽 杖杖樹前亭 其心何滿
麗、刻意好塗花、從今無復夢寐逢

忘中人好快醉 詩の春秋賦其
詩酒間賦

又

蕭山又枕海、一郭斜日澗、鐘陳藥王寺、
波明鳥恨花、坐湯未必能却免、人買四時

氣便好 春城有買氣
候之語故及

又

埋漢樹皆古、觸石亦偏出、美人仍舊士、天寒
嶺歌愁及、履道又眉橋、時路也、連晴秀俊

一 願 あり



紅梅重君の肖像



紅梅重君の肖像

○齊の孟春君と交へる一門家をも珠のみの
 大福を蒙るも、其の行ある大分を重を以て利分
 をえりて不、多くか、り出候所、取立のりる
 進賄と交へる、留意ある臣下を考りし、其時
 田へ孟春君の、衣の元々金も何をか、といふ人
 来りしときやと申候、いふ孟春君の、いづくに我
 か家に、いづく物を穿て来りしと申候、然るに
 行ありたり、いづく付候る姓を教千人呼在、其の
 衣のか、りの手形を山の如くつみん、いづく入るを捕
 き捨て、いづく、其方の主人孟春君の仰ふ、いづく
 跡手あり、いづく、孟春君の、いづく、いづく、
 其金、いづく候、手形を焼捨て、由申けん、いづく

と見えたり申候一心は油清りしきく、利分自ら出し候
時を知り人の金銀の好悪と申すも大由の士卒を
つわふこととて、其の金銀おりのがらう、陸あつと、継来
すること清りしき候、こまに、留置と人と歌の
すれあひて、送すく時をえりしき、大切候時と言ふ
ことあり、呼吸の息のつく内も、考し候、油あつと、ぬ
しめし候、留置と

○野金銀の席のたぐを候、夫に乗りて、概とありし者の
一旦夫をおり候、忽ちよくいん候やうに成りて、概もあ
しく、評判も下りしき也、左候の、おのり、是れおるき、
必ず手前を卑下せし、他、今日増し金銀の多き、体
も、利用をば、おるき、左候、ん、徳、ん



この内、油も、宣、あつと、若、帯も、あつと、評判、しき候、貫
木、金、銀も、あつと、内、油、不、勝、手、しき候、こま、
ハ申す、ま、候、左、候、に、大、き、候、他、強、の、ろ、う、候、上、ま
用、捨、も、こ、人、も、金、と、か、へ、候、亡、も、難、も、ろ、
こま、候、又、其、概、に、乗、り、候、出、日、も、こ、ら、き、金、も
出、る、候、又、思、の、油、を、有、る、候、是、席
に、り、其、身、に、迷、候、他、人、も、金、を、金、を、金、を、
候、上、虎、の、お、そ、ろ、候、而、就、の、あ、候、か、換、る、
候、中、い、づ、れ、候、名、を、名、を、候、人、の、名、
を、さ、げ、候、あ、候、名、を、さ、げ、身、を、引、き、候
候、下、り、七、席、も、候、換、も、身、上、り、
候、日、

○兎三窟をけつしと申す事新田某に御座り
是を打つる間に入道を候、又ある兎二窟を
とて爰にかくん申す窟をけつし候、其傷の中
狩人杯を逢ひて逃げ跡のあらかき時、是こそ
狩り、爰に兎がうらやま也。是を打つて大換り
仕り、又尖も逢ふるに、今のあしりの縁合を
いつらよふべしと思ふ、油ひを候、其を置
て六ふしき時のかくん跡をあまきと替へる也
也、伝を平日氣のつかぬゆゑ、あそこ爰に窟を
けつし置し、兎の心白にこそうらやま候、打て
其窟のけつし候とのかゞ跡のあらば、いは、其是
是と身代の大小に伝へ候、地人のいふ、とて

伝の上

二月十日抄

○此年の十月に早稲の大子、金子堅太ら、子供
をねき、廿八年前、宿洲殿の後、子供を米田に
使し、其時の関係ある時、大佐、彼れらに
トを返し、米田より、若木の、後助を得、追々
道を通り、折り、折らば、甲斐縣令の、親上の、
問題、乗る、人を行法つ、時、つくこと、如
何、其味、ある、田、米田、其、時、日本
を、折、入、其、時、
田、折、其、親、七、感、其、
子供、其、折、其、早、大、
其、其、其、其、其、

親戚者まじり内閣一掃送、日露親善の終局を米英欲
二位と干渉しうのと云ふ秘多きまじり知るゝふつ比。そ
しし留るゝことハ初多の終局はうゝ。露公使金、
油傳をも米英欲の托とす。時、早やく樺太を
取んと秘告し比の事ルースベルトがあることハ又
あるのと云いせるを得ぬ。若しうかと購わぬ事、
比と樺太を争う事ハかといふ、日本ハ念ひせることハ
未だうつたひあるも比の購わぬ事ハ露公使の証言に
かゝる満洲の鐵道位のことハ樺太と改修しうゆゆ
支んと何を得る事ハ無つ比位と云ふ事ハ又満洲
の鐵道も支んと露公使は返却の時、出来ぬことハ破
壊し比、これを差を論理するといハ度契の日ハ

横濱

困りしものありしことを早く元を取つ比米露の大争事
家ハルマンは日本政府の勧め自からする任事と云ふ
と申出、日本政府も差をうつらう比、差を將來
日本の差ハ大なる不利を懸すことを早く知つて、
比を説き、資金を別々、比はうと云ふルースベルト
ルースベルトの動向もあつて、まゝお露も日本ハ
府日はハルマンの破約を道に、後年知るとする
厄災を免かぬ、比も本米露の、
比ある。ルースベルトハある日ハの國情、道に
日本ハ五細五の露公使の元、ロース主義を掲げ、
子に勧められ、比の常つて支へたことハ又、比
の秘説を、比の地、ルースベルトの別在、比

と、あつて、ライスマーベールに於ける、大統領の別荘の
ありも、實に、あること、が、細致、も、あつて、之
を、後、ん、ひ、も、真、心、を、感、ず、る。

米、田、大、使、領、事、の、私、生、活、の、め、あ、る、の、間、ま、ひ、あ、る、か、り
忠、信、の、心、の、あ、る、た、り、の、身、の、活、張、り、殊、に、其
部、分、を、振、き、ふ、り、左、に、ぬ、め、あ、る。

二月十一日

横濱製

「七月七日の晩に一晩泊りに来い」

其の約束に依り七月七日の午後行きました。さうしてオイスター・ベールの自宅へ行つて見ると、いかさま彼が言うて居る通り、どだい周囲は野原でサガモア・ヒルといふ山の中になつて居る。その家の周囲には垣も何もない。隣境にはちよつと境石が置いてあるのみで、全く百姓屋のやうなものである。そこを道路から馬車で行くと、簡単な木造の家がある。はいり口があつて、内にホール、即ち廊下があつて、右が大統領の書齋で左が應接間、さうしてこの書齋の後ろに小さな食堂がある。それだけである。二階はみんな寢室。さうして廊下の突當りに広い所がある。これは可なり広い。それから大統領に逢つて歓談した。兎も角も僕の家を見せようと言つて、ルーズヴェルトが自ら案内して、これが俺の書齋、これが食堂、この広い所は、大統領になつた後、夏の休暇中に各國の大公使が國書を奉呈する所だ。その爲に建増しをしたのだといふ。こゝに俺がテーブルに坐つて居た。するとこゝへ外國の大使が國書奉呈に來ると一々説明したが、何の設備もない。丸でがらんだうの部屋である。先づ極く質素な家屋である。

その晩、晩食を食べた。簡単な食事です。ソップと魚と肉と野菜、果物とコーヒー、先づ中流階級の生活です。ちつとも贅澤ぢやない。それから食後應接間に行くといふと、そこに唯一つの丸テーブルの大きいのがある。その真中に石油のランプが置いてある。ガスもなければ電燈もない。明治三十八年の七月ですよ。私の東京の家ではとうに電氣を點して居る。アメリカのニューヨークで、大統領たるものが自宅に電燈がない。石油ランプが一つ真中に置いてある。そこで大統領夫婦と子供と私と何やかやと

雑談をする。十時半頃になると奥さんがそろ／＼戸を閉めた。硝子の戸のネヂを自分で閉めて、さうして置いて

「もう私は休むがあなた方はどうなさる」

と云ふと大統領は、

「ちよつと媾和談判に就て金子さんと話があるから、お前は先にお休みなさい」と答へた。

それから、ルーズベルトの奥さんは、ブリッキ製の手燭の真中に蠟燭を立てたものと、それにマッチが一箱を添へて

「これは金子さん、これはお前、こゝに二つ置きます」

と云ふてさうして自分もそれと同様のものにマッチを點けて、

「さあ、書齋におはいりなさい。こつちのランプの灯は消します」と云ふてびしやつと應接間の石油ランプを消して、さうして

「左様なら……」

と云うて奥さんは二階の寢部屋にはいつて行つた。廊下には燈一つもない。下女も下男も疾うの昔彼等の部屋にはいつて寝てしまつて居る。大統領と私を置き去りです。そしてルーズベルト大統領の奥さんが自分で戸閉りして、自分で石油ランプを消して、我々日本人の車夫部屋にでもあるやうなブリッキ製の手のついた蠟燭立を一つづゝ置いて寢室に上つて行つた。簡易生活もこの位の簡易生活は外にはな

と言つて間もなく、

「あゝ、一つ大事なことを忘れた。こゝまでは俺がお前に風邪を引かさんやうにしたのだが、大事なことを忘れたから、ちよつと僕と一緒に来い。下に来れば分る」

私も下に行つた。どこへ行くかといふと廊下の突當り。

「こゝだ。これは必要な所だ」

成程、便所だ。(笑聲)

「夜中にお前が用があつたら、これを知らさず置いたら大變困るから……。この抽斗を開ければソープがある。こゝには手拭があるから……。もうこれで盡く終つた」

又それから二階に上つて来た。さうして手を握つてルーズベルトは下に行つた。それから私は着物を脱いで寝た。その時に考へた。私人としての生活はかう質素なものである。これが一億二千萬の國民の主権者である。實にこれはえらいものだ。これが即ちルーズベルトの人格の尊い所である。而して、寢て段々蠟燭の灯がトロ／＼燃えるのを見詰めながら考へた。日本國民五六千萬居るが、一國の主権者に便所の世話までしたのは金子である。實に私は幸福な人間だと思つた。實にその時は感慨無量だったのです。併し斯くまで金子を遇するのは金子に對してぢやない。日本國民に對する好意だと私は坐ろに感じた。

さうして、それでまあ寝て、明くる朝八時に起きて朝の食事を家族と共にした、それから又用があるからと言つて、今度は椽側に二人して安樂椅子を出して、それから話がこのモンロー・ドクトリンに及

「君か」
蠟燭を持
蠟燭を持
蠟燭を持
田か
少
億一か
「君好」
油
指し
君か
真中
水が
二階
に連
た。こ
事ら
かか
てけ
部
こ。こ

と言つて間もなく、

「あゝ、一つ大事なことを忘れた。こゝまでは俺がお前に風邪を引かさなうにしたのだが、大事なことを忘れたから、ちよつと僕と一緒に来い。下に来れば分る」

私も下に行つた。どこへ行くかといふと廊下の突當り。

「こゝだ。これは必要な所だ」

成程、便所だ。(笑聲)

「夜中にお前が用があつたら、これを知らさずに置いたら大變困るから……。この抽斗を開ければッ
ーブがある。こゝには手拭があるから……。もうこれで盡く終つた」

又それから二階に上つて来た。さうして手を握つてルーズベルトは下に行つた。それから私は着物を脱いで寝た。その時に考へた。私人としての生活はかう質素なものである。これが一億二千萬の國民の主権者である。實にこれはえらいものだ。これが即ちルーズベルトの人格の尊い所である。而して、寢て段々蠟燭の灯がトロ／＼燃えるのを見詰めながら考へた。日本國民五六千萬居るが、一國の主権者に便所の世話までしたのは金子である。實に私は幸福な人間だと思つた。實にその時は感慨無量だつたのです。併し斯くまで金子を遇するのは金子に對してぢやない。日本國民に對する好意だと私は坐るに感じた。

さうして、それであつて、明くる朝八時に起きて朝の食事を家族と共にした、それから又用があるからと言つて、今度は椽側に二人して安樂椅子を出して、それから話がこのモンロー・ドクトリンに及

標原製

恐く其の~~世~~随一に、杉聴雨をどり較べても
其業の~~式~~武~~次~~上~~と~~い~~は~~る~~事~~年~~々~~の~~其~~地~~位~~関
歴が~~る~~て~~し~~ある~~業~~也、~~此~~歌~~る~~る~~事~~山~~陽~~を~~も~~後~~へ~~陸~~を~~
死~~す~~る~~事~~も~~得~~ぬ~~が~~、~~お~~の~~書~~也~~山~~陽~~の~~故~~人~~受~~の~~よ~~し~~書~~ひ~~あ
る~~が~~、~~其~~の~~室~~も~~も~~書~~き~~振~~り~~、~~率~~お~~的~~態~~な~~が~~あ~~つ~~て~~、~~大~~春
未~~堂~~も~~も~~友~~か~~ま~~る~~。云~~因~~寺~~の~~尾~~を~~、~~及~~心~~を~~いと~~感~~
い~~は~~す

二月十三日

口内人感冒に罹り持病の枝口も又かたじけなく
発熱のくる或は肺炎と云ふことを恐る全身
過布を行ふと漸やく肺炎を免る、口全身
過布の解熱に効あること、今日のみならず
実際にも、此の過布こそと云ふ所の~~子~~原~~あり~~を
以~~て~~於~~前~~終~~り~~、~~馬~~肉~~を~~薄~~く~~切~~つ~~て~~人~~肺~~の~~
服~~背~~に~~垂~~り~~つ~~め、~~酒~~の~~濕~~布~~を~~、~~と~~る~~事~~也~~効~~驗

あゝ大なるものあり。或る人の死骸の跡は、
死を聴きし此法を以て治し得たところ、
をある一ぬく

○田中光顯伯九十の壽を尚豊饒とす、
年荒かき倒家八十以後多く子あり、
伯或の自身の子とありや、疑を抱き、
諱る自家の精液を捨ち、
果精液と精液あることを認め、
教すと、
昨夜の夜、
昔れと杯と奉けをみる所、
昨夜の夜、
昔れと杯と奉けをみる所、

漢文

いんかき、
派を、
か一頁、
お手、
的大事件、
切迫、
りるを、
くの概、
え、
二崩、
お手、
條の行

打んじ。仍て其の切ぬきを右のぬりを保存するにせし
此(昭和八年二月十五日)

○その教業中、文行巻之主客リ一巻の論こよふ
を得た。此の論十二回を十二月二日配し、華字
凡の服仕の磨の肝要の字と揮ぬぬとよふ
文字に依り判する。元文四年の磨と知んて
り、論こよふ程々の類あるも能く長近とて
この論こよふ程々の類あるも能く長近とて
の辨字も支那の乾隆四年の論こよふ
ハ寛保迄も寛延十一年磨の如く十七年
前也

此の文の巻首に張良才の無何があつて教生

二月十五日記

漢文



漢文の巻首に張良才の無何があつて教生
二月十五日記

がやホキ質を



西村小吉左門長派員員

露骨はきはまる 権謀術の外交交

大國小國入り亂れ

特派員小室誠

一流外交家 車輪の活躍

★今日の外交界は、露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

赤禱

受けたる赤禱、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

あゝ

大國小國入り亂れ、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

私は

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

實を

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

雪の

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

會議

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

かう

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

水木飲みパンを噛つて

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

ジュネーヴ 土産

依然たる大國專制主義

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

何が議事滞の素因か

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

私の

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

祖國愛に熱した

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

松岡さんの度

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

天晴れ自主的

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

特派員 西

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

水木飲みパンを噛つて

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

何が議事滞の素因か

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

私の

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

祖國愛に熱した

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

松岡さんの度

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

天晴れ自主的

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

特派員 西

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

水木飲みパンを噛つて

露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。露骨な権謀術が、我々の外交界に大活躍するに至つてゐる。

本飲みバを嗜つて

本飲みバを嗜つて、酒を嗜むは、古くから日本人の習性である。酒は、人を和ませ、心を慰め、時には勇気を奮立たせる。...

何が議事滞の素因か

★ジュネウヴにおける我々の努力は、一歩も進んでいない。我々の努力は、一歩も進んでいない。我々の努力は、一歩も進んでいない。...

安田作兵衛流の戦法か

安田流の戦法は、先づ公明正大である。安田流の戦法は、先づ公明正大である。安田流の戦法は、先づ公明正大である。...

会議の公開に一の弊害

★会議の公開は、一歩も進んでいない。会議の公開は、一歩も進んでいない。会議の公開は、一歩も進んでいない。...

壽府は會議場に不適當

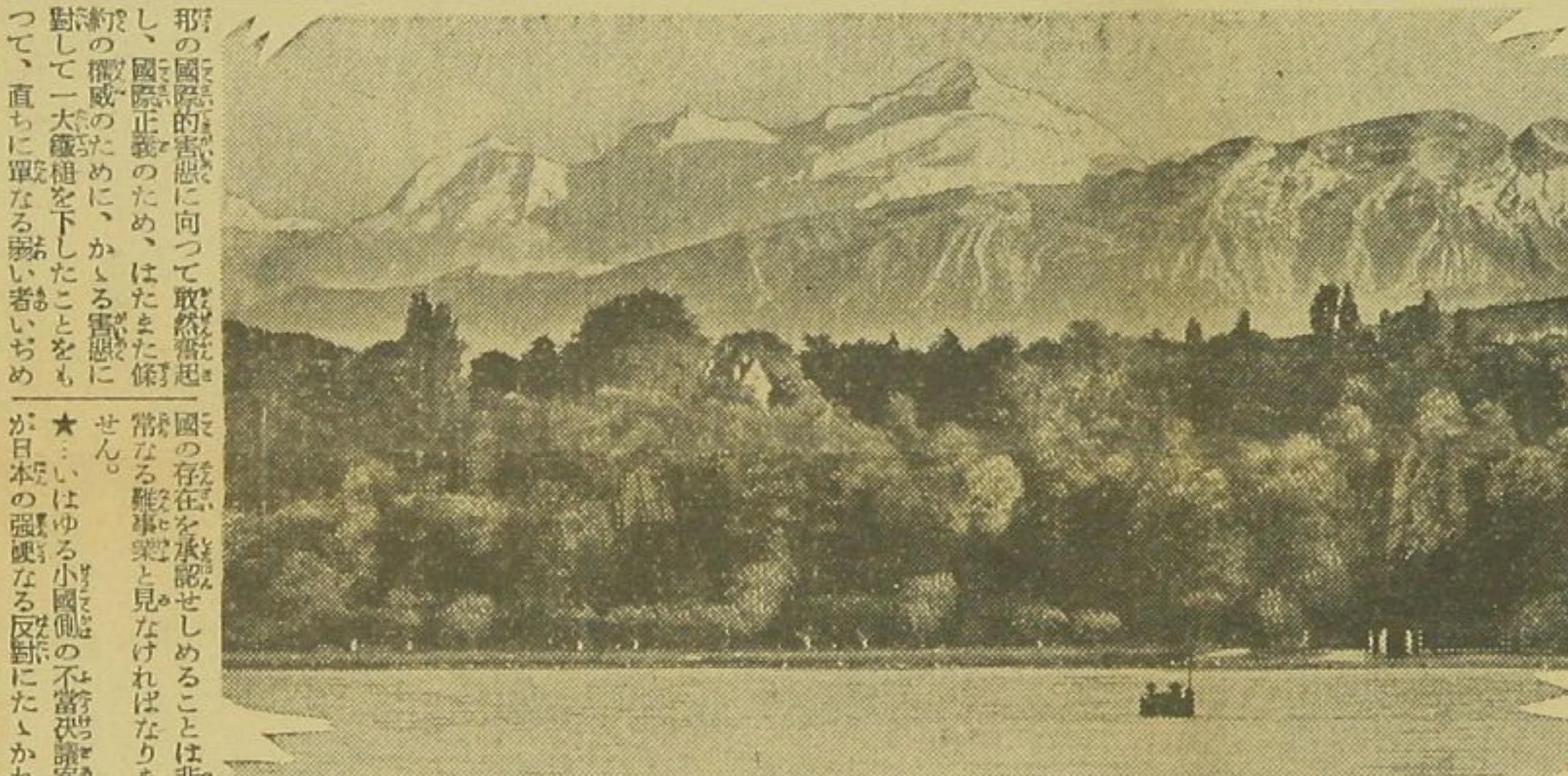
★壽府は會議場に不適當である。壽府は會議場に不適當である。壽府は會議場に不適當である。...

讚美の言葉は考へもの

★讚美の言葉は考へものである。讚美の言葉は考へものである。讚美の言葉は考へものである。...

横槍は甚だ越權の態度

★横槍は甚だ越權の態度である。横槍は甚だ越權の態度である。横槍は甚だ越權の態度である。...



モンブランとレマン湖

この風景は、ジュネウヴの美しい自然環境を示している。この風景は、ジュネウヴの美しい自然環境を示している。この風景は、ジュネウヴの美しい自然環境を示している。...

この風景は、ジュネウヴの美しい自然環境を示している。この風景は、ジュネウヴの美しい自然環境を示している。この風景は、ジュネウヴの美しい自然環境を示している。...

この風景は、ジュネウヴの美しい自然環境を示している。この風景は、ジュネウヴの美しい自然環境を示している。この風景は、ジュネウヴの美しい自然環境を示している。...

愛に熱した

愛に熱した、それは、心から湧き出る感情である。愛に熱した、それは、心から湧き出る感情である。愛に熱した、それは、心から湧き出る感情である。...

岡さんの度胸骨

岡さんの度胸骨、それは、日本人の精神の象徴である。岡さんの度胸骨、それは、日本人の精神の象徴である。岡さんの度胸骨、それは、日本人の精神の象徴である。...

天晴れ自主的外交陣

天晴れ自主的外交陣、それは、日本の未来を担う若者たちである。天晴れ自主的外交陣、それは、日本の未来を担う若者たちである。天晴れ自主的外交陣、それは、日本の未来を担う若者たちである。...

特派員 西村丁一

私は、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。私は、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。私は、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。...

かくして、私は、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。かくして、私は、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。かくして、私は、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。...

私達は、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。私達は、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。私達は、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。...

夜は、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。夜は、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。夜は、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。...

大膽に、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。大膽に、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。大膽に、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。...

今日、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。今日、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。今日、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。...

今日、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。今日、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。今日、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。...

今日、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。今日、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。今日、今日、ジュネウヴの朝を覚めた。...

打込紙。仍て其の切ぬきをとるぬを保存せよ。こゝに
（昭和八年二月）

〇この数集中心文行を三主客リ一巻の倫こぶら
を得た所の約十二回を十二月二日配し、華中



ホ◇ 労働者生活の一角

労働者の生活

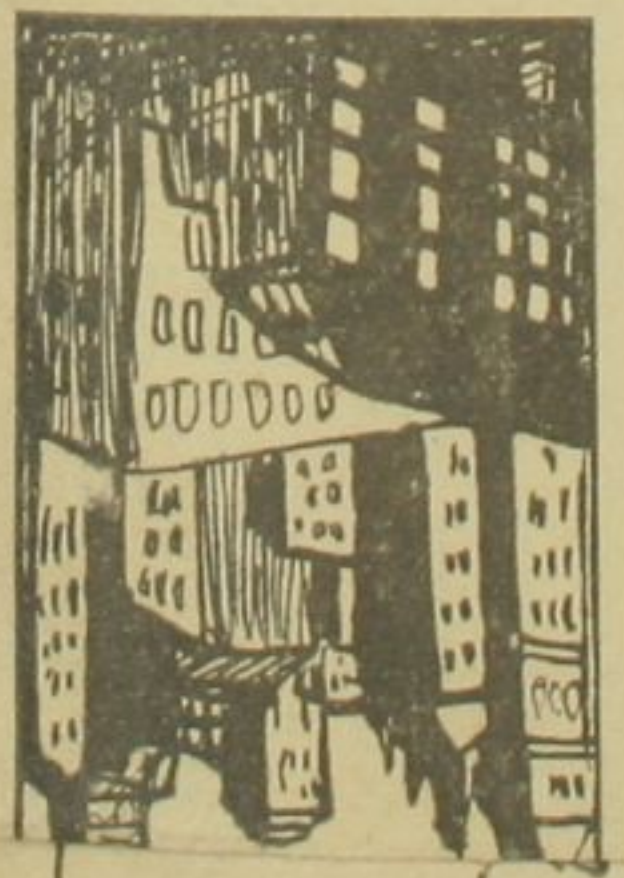
労働者の生活は、常に苦闘の連続である。彼等は、僅かな賃金で、家族の生活を支えなければならない。そのために、彼等は、長時間の労働を強いられており、その結果、健康を害し、生活が苦しい。しかし、彼等は、決して屈服せず、不屈の精神で、自分の権利を求め続けている。彼等の闘争は、社会の進歩を促す重要な力となっている。

労働者の生活

労働者の生活は、常に苦闘の連続である。彼等は、僅かな賃金で、家族の生活を支えなければならない。そのために、彼等は、長時間の労働を強いられており、その結果、健康を害し、生活が苦しい。しかし、彼等は、決して屈服せず、不屈の精神で、自分の権利を求め続けている。彼等の闘争は、社会の進歩を促す重要な力となっている。

國専たる依

國専たる依、これは、労働者の権利を守るための重要な組織である。彼等は、労働者の利益を代表し、労働主と交渉し、労働条件の改善を求め、労働者の権利を守り抜く。彼等の存在は、労働者の生活を守るための重要な盾となっている。



労働者の生活

労働者の生活は、常に苦闘の連続である。彼等は、僅かな賃金で、家族の生活を支えなければならない。そのために、彼等は、長時間の労働を強いられており、その結果、健康を害し、生活が苦しい。しかし、彼等は、決して屈服せず、不屈の精神で、自分の権利を求め続けている。彼等の闘争は、社会の進歩を促す重要な力となっている。

多く関係しめれば早大出政部の主幹を辞すも概
 分を得れば、喜田が早大総長を辞すも後志きくも身
 後の事への仕末に、息を吐きつゝ、担任のあらむこと
 を辞すも其一端として出政部のうちも田中現半
 大佐も、春七んとすることらうたのち、自今も喜田
 城内と共に辞することらうた。長い河内而も
 南つておれば、退くも南つても、あつて、武成と
 き口を得る。偶々今後も、あつて、任をの
 衛に、あつて、武田に、あつて、来れば、自
 分の國情も漏れし。是れ、一般出政部の社名に
 流るべきことらうた。武田の、あつて、心持と
 ることらうた。自今も長い河内、苦境に、あつて、事、あ
 つて、



らう遊、近年の悲境、遊、無恥を、近年
 續け、やう、あつて、因、あつて、心持と
 ることらうた。武田の、あつて、心持と
 と共に、あつて、武田の、あつて、心持と
 出政部の溝、あつて、武田の、あつて、心持と
 ひあつて、あつて、武田の、あつて、心持と
 七占めておれば、あつて、武田の、あつて、心持と
 の無情な力、あつて、武田の、あつて、心持と
 田と、あつて、武田の、あつて、心持と
 初まう、あつて、武田の、あつて、心持と
 此の、あつて、武田の、あつて、心持と
 まつて、あつて、武田の、あつて、心持と

時期、赤字が生じて、吾族の経路は、莫慮を蒙るること
となり、此時、鳩山校長と天竺、斯の吾族の累を
及び、仕事に危険があるから、吾族をへしと、あつた
起つた。今、七尚、ツキリ、自今、記憶を存してあるが、此
の議のあつたの、種々、汝の、進新と、よ、今、さういふ
時、其の後の、お話を、よ、やう、備へ、え、これ、西澤、柳、龍、の、日
本、重、心、此、流、り、あ、つ、た、時、自、今、抗、議、し、た、惟、一、の、よ、め、あ、つ
た。彼、等、吾、族、の、自、今、は、任、か、し、て、く、ぬ、は、自、今、の、任、を、を、や、ま、
但、し、之、の、後、を、此、日、吾、族、と、す、ま、は、け、は、恐、ろ、し、世、の、福、は、さ、し、ぬ
と、或、の、條件、の、下、に、自、今、此、の、任、を、を、吾、族、の、任、を、を、
す、こ、こ、さ、う、の、た、の、が、今、の、出、版、部、の、た、の、因、に、あ、る、自、今
から、見、ると、切、南、を、後、の、附、属、し、て、必、要、の、模、範、に、あ、る

昭和十一年

よ、を、保、つ、た、一、年、や、二、年、ね、え、が、僅、か、さ、う、い、ふ、と、さ、う、い、ふ、
と、い、ふ、を、投、け、出、す、さ、う、い、ふ、い、ふ、河、口、も、ケ、ケ、ケ、の、措、置、と、あ、る、が
又、と、云、へ、ば、其、頃、か、ら、鳩、山、と、天、竺、が、吾、族、の、對、し、を、情、に、嫉
妬、が、あ、つ、た、(吾、族、が、後、に、爆、発、し、た、の、ひ、あ、つ、た、) 及、抗、が、原
因、に、此、身、業、の、廃、止、論、も、出、た、と、あ、る、自、今、は、任、し、て、あ、る、也。
この、此、身、業、が、吾、族、の、個、の、任、を、を、移、り、初、め、の、お、お、中、國、語
を、感、じ、た、が、吾、族、が、更、に、隆、盛、と、さ、う、い、ふ、と、き、た、こ、の、う、就、し
自、今、の、つ、く、く、感、じ、た、こ、の、い、ふ、出、版、事、業、の、利、益、個、人、の
責、任、に、や、ら、ぬ、が、利、益、成、功、し、さ、う、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、こ、の、各
校、に、も、出、版、部、が、多、く、成、功、し、さ、う、い、ふ、の、名、亮、の、自、今、の、自、力
が、あ、つ、た、こ、の、任、を、の、肉、利、を、缺、か、さ、う、の、事、だ、と、い、ふ、校
の、此、身、業、抛、棄、に、無、謀、に、あ、つ、た、が、實、に、こ、ん、を、個、人、任、を

と移し此の賢明のやり方とせらるるが保しよる事四が
拾い上げれりからこの事と云ふんが寺持屋や山藁の
事の二年も移し此と云ふ。海義松出版の事命のい
らうてわんか知んるの事ある。

事のハ自分の手も引受けて拾苦の区名便令便
機と云ふ。着下株を権由や夏戸や其他三四の事と
つれ、その中より大隈の事もあるが、天竺の事、天竺
の事株と欲せんとして此が最初慶應論あるから
氣かてし株をさける譯も由かす、全然出版の
事ハ無関係と云ふ。勿論相中り株をさる後く欲つたが
えのみの後を此の事と云ふ。関係の事あるの事と
あるは、滑り真加事と云ふ。看版料の事。

三

斯の關係に出版部事業が通る長一此が一時ハ
解る隆盛と云ふ事、河三の能中をつつたこと
もあつた、即ち左の事ハ其の盛衰を語るものもある

- 大正九年十月ー全十年九月 二割(十年中)
- 大正十年十月ー全十年九月 三割(四年中)
- 大正十四年十月ー昭和三年九月 二割(三年中)
- 昭和三年十月ー全四年三月 一割五分(五年中)
- 昭和四年四月ー全九月 一割(五年中)
- 昭和四年十月ー全五年九月 六合(五年中)

以後今日も無配事(其期分五年)

此の長い期間に於て出版部が存続し納付し此の株
の配当金を和めしつて、浦元山等の附屬社を合

十の二十万圓に達してゐる。

出取部が事業の中絶の論議を好んでゐるが其の最盛の
の時と最衰の時との見ると左の如くである。

最盛時 大正十三年十月より全十四年三月まで

売上高 五十四万四千五百圓

最衰時 昭和六年十月より全七年三月まで

売上高 金拾六萬八千六百四十二圓

又差金 三十一万五千五百圓

但し最盛時と最衰時とを比較するに各科目の利益
あり全体に於て損失を呈し最盛時の
中各利益の多きを呈す事由内の
利益を生じたことあり



如斯くも出取部の黄金時代なる事取の教授も其の
比部が歴史を心得る一方の方面から其の益を呈しき所
得と少数を扱関係者が就其の携取をわびるも
誤くともあるは此の如くを三十万圓の増資株主
組織を改めるといふ即ち早大も大なる株主とな
つたの如く。十萬圓の株主組織から三割と云ふことと
尙かあり。是れ人の目を惹き動かし其の益を呈しき
は其の如く、いろいろ疑念を生じ其の株式会社と
するつては、株式増したから既中幸も倍々するつて
深

今、此の二十万圓の増資があり、金銀が杜塞してゐるが
出取部は長い間借金をし其の無つた、其の用とある

バミハ現金の為めあつた。斯の如く餘裕があつたから日清生
命の株を六百日印刷の株を千四百五十株も有する譯
じあふえと今日より押つても十七万円のあつたから
尚余地を購へ入る事務本に建設せよつた(多量建設
)今日印刷三億の建設と云ふ(概
て出版の償支償いさふふか多かつたが、餘裕出版
多と全部成りした。

出版部の黄金時代、第一に大官の切符ある
多数株と株と持てて毎年の利益金を以て押こ
こ完して読むとんとを養育の資と充てんとするこ
とであつたが、この日黄金時代がいつまでも續くと
と夢想して身玉あふ、拂込て充る利益があるとする



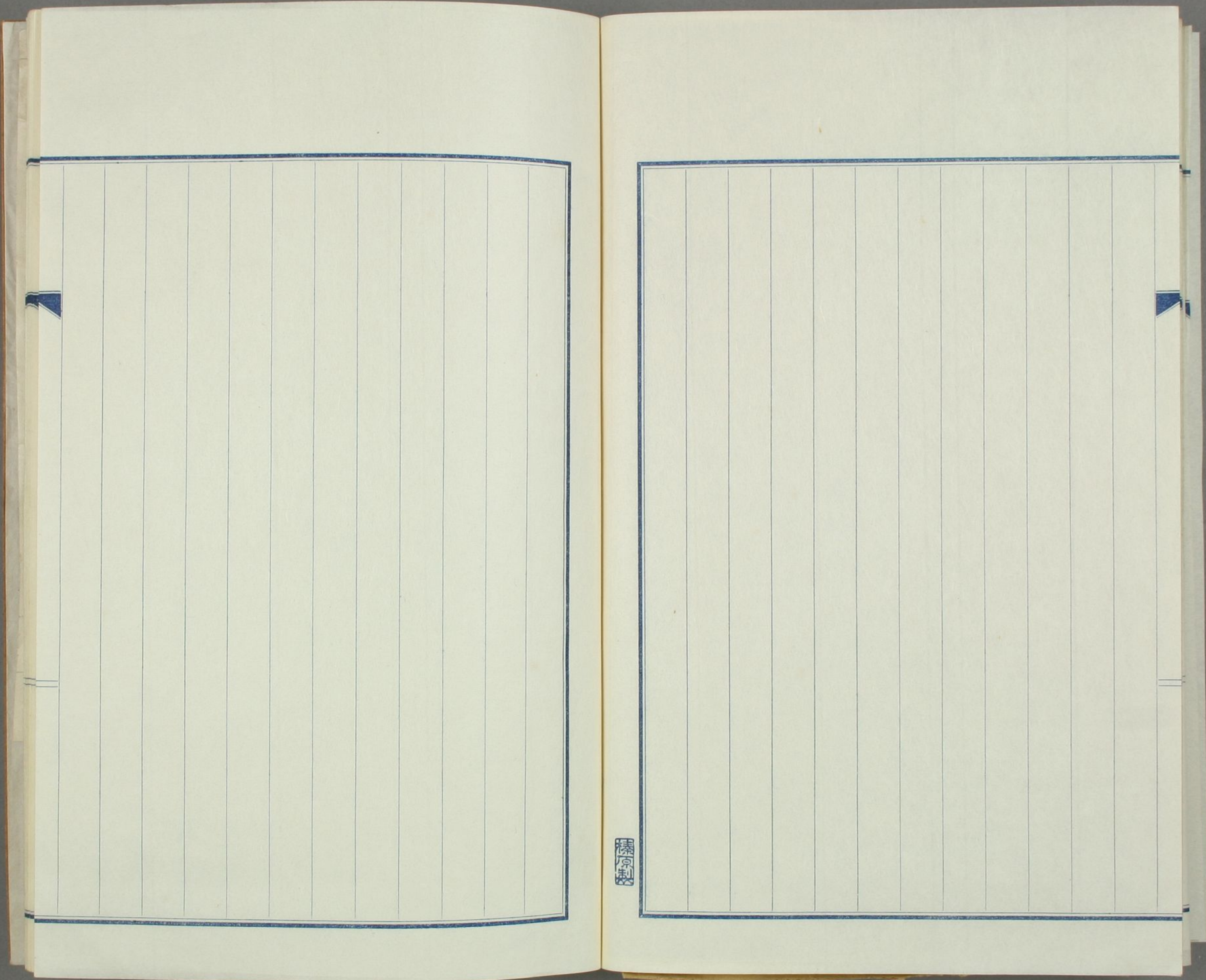
と云ふ事と云ふのむある。今とすると又(心算)つた
出版部の何故左り前と云ふのかと云ふと此の二三年未
の読者の不日集の原因むあるが、木造建設本の多
額本とコミックレートの建物は造りかへて十萬圓の
を投じたこととが借金せし初まり、追々となら
るるさう借金もあつたやうなうも遂に廿四五萬圓
の負債もあつたやうなつた。これが原因むあるが、
又、此の根本的原因がある。

出版部の前と云ふことと株式投資の今と云ふこと
はけんあ、是れ定款の上と云ふことと云ふことだ。是れ
今時代の情勢のやり方が何んとして七除き得るつた。高
田部長の一方は大社長むあつたから、今此の社長むを系

實と部長を四社にだけんと、七とく高田の私有のから
及底したのだから、いくら今世にとうても、高田の精神
ハ較し変るることなき。高田若流ひあつた。高田二面
大学の徳もひあつた関係から、種々の名目ひ高田の
ひ出金すること多かつた。やん何々今の即成を、やん学
生の将大鹿金、やん校友事業の株の引受、やん総長用
の自動車、やん附、等々、人事に就て高田の債類の人が
多く、職員と取り、中々の物産を扱へたよもあつた、何れが
すこしともさうさうと、倚るよめ、よもあつた。此等の點に就
て、高田自身ハ一命非を感して、おまけを、株式会社に
と、百と、不似合の事、少くともあつた。放漫な流れた
ことハ事實ハある。一人の私有から出費、ハ今世ハ形

高田

く味り行くのも、自死ハあつた。自分が主幹の地位を擁し
て、どこまでも今世主義を押し通して行くことハ出来
る。この頃の、自分の不肖から、ひあつた、先を押し通
せ、接突を生ずるから、隠忍することハ、己と、得るこ
つた。ひあつた。ぬさ、ひあつた。出部ハ関係ある。わん、あつた。
あの人、さく、退け、ハ今世ハ主幹、高田、市、高田の退部
ハ、あつた、ぬさ、と、今世ハ改革、ハ評、と、ぬさ、と、
ハ、



標原製

以下
10丁
白紙

